

平成31・令和元年度

埼玉県学力向上研究校指定事業・学校課題研究紀要

研究主題

一人一人の学びを保障した授業づくり・学校づくり
～学び合いを通して～



坂戸市立千代田小学校

目 次

あいさつ	P1
I 研究内容	
1 研究主題	P2
2 研究主題設定の理由	
(1) これまでの経緯	P2
(2) 千代田小学校が目指す研究の方向性	P3
(3) 学び合いの意義と効果	P4
3 研究組織	P6
4 研究の方法	P6
5 研究日程	P7
II 研究に関わる主な取組	
1 学力向上指定校事業	P8
2 ブロック研修の方法	P25
III ブロック研修デザインシート	P26
IV 全体研修会研究協議会記録	P55
V 3行レポート	P58
VI 成果と課題	P74
ご指導いただいた先生・研究に携わった教職員	P75

あいさつ

坂戸市立千代田小学校 田中 誠一

令和2年度より全面実施の新学習指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、本校では、平成28年度より児童の「主体的・対話的で深い学び」を実現するために「学び合い」の研究に取り組んでいます。

本校児童は、基礎的・基本的な学力は身につけているものの、それを十分に表現し活用する力が弱く、自己肯定感の低さによる自信のなさが見られます。そのため、本年度も学びの共同体スーパーバイザー 谷井 茂久 先生、麻布教育研究所 永島 孝嗣 先生をお招きして「学び合い」による授業づくりを、教職員が学び合うこととしました。

特に今年度は、子どもたちが一人残らず、45分間学び続ける授業づくりのために、授業中の子どもの学びの様子を見取る力をつけることを中心に授業公開を重ねていきました。

また、学び続けるための「ジャンプ問題」のあり方や、学びの資源としての資料準備、研究協議の実施等、学校全体での取り組みとなり、まさに、一人一人の学びを保障した「学校づくり」を目指した研究を進めました。

今年度の研究成果を本研究紀要としてまとめました。本校の研修の歩みとして、また、今後の資料として活用できるよう作成いたしました。来年度以降も「一人一人が45分間学べる」授業づくりを核として、更に研究を進めていきたいと考えております。今後もしもご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

結びに、本研究を進めるあたりご指導・ご支援くださった学びの共同体スーパーバイザー谷井 茂久 先生、麻布教育研究所 永島 孝嗣 先生、坂戸市教育センター所長 森澤 清 先生、指導主事 兒玉 直也 先生、指導主事 武田 浩明 先生に心よりお礼申し上げます。あいさつといたします。

1 研究主題

一人一人の学びを保障した授業づくり・学校づくり ～学び合いを通して～

2 研究主題設定の理由

(1) これまでの経緯

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016)では、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手順を効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。」と指摘している。

平成 29 年に告示された新学習指導要領の総則第3の1においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について示されている。上記に示されている「生きる力」を育むためには、これまでの教育実践の蓄積を踏まえて授業を見直し、改善することが必要であるとしている。

先述の中央教育審議会答申では、「主体的・対話的で深い学び」を実現することの意義について以下のように述べ、3つの視点を提示している。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。

「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容については、以下のように整理することができる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることである。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。子供たちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はこの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

これら「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点は、子供の学びの過程としては一体

として実現されるものであり、また、それぞれ相互に影響し合うものでもあるが、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要である。単元や題材のまとまりの中で、子供たちの学びがこれら三つの視点を満たすものになっているか、それぞれの視点の内容と相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し改善していくことが求められる。

三重大大学教授 岡野 昇 氏は、上の答申には、学習院大学教授 佐藤 学 氏の「学びの共同体」の理論が直接的ではないが示されていると指摘している¹。それはすなわち、①では、学びと「自己」とのつながり、②では、「他者」との対話、③では、各教科の特質という「対象」との関わり方であり、それらによって「主体的・対話的で深い学び」につながるとのことである。

つまり、本校は「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、佐藤氏の理論を実践していくことと言い換えることも可能である。

坂戸市学力向上推進委員会資料の中でも、坂戸市は「学び合い」を推進すると示している。なぜ、「学び合い」なのかについては、前出の資料の中に、技術革新など、急速に変化する時代において、主体的に変化に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことができる子供の育成が重要であるとしているためであり、それを解決する方法が「学び合い」であるとしている。

本校では、平成 28 年度末から上述の「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るために「学び合い」を中心に、教員の授業改善を図る校内研修に取り組んでいる。

本校の児童は、「解答に空欄が多い」児童や「授業がわからないまま終わる」児童、「自己肯定感が低く、他者から認められてないと感じる」児童が多くいることが、教師や児童の実態アンケートから浮き彫りになった。そのことを受け、まず、主体的に課題を捉え、分からないことを追求しようとする児童の姿を「自ら学び」、他者の力を借りたり貸したりしながら互いに学び合っていく姿を「互いに高め合う」とし、研究に取り組んできた。

平成 29 年度は、基本的な学習の流れが分かりやすい算数科を中心に研究を進めた。副題は「～算数科における学び合いを通じて～」とした。1 年間取り組んだ成果として、「コの字」や「グループ」の形での授業に慣れた、自分から友達に聞ける児童が増えた、学び続ける時間が増えたなどが挙げられた。また、教員の中での「学び合い」も推進され、一人一公開授業や研究協議などが日常から行われる「教師間の同僚性」が向上されてきたことも成果として考えられる。また、「見取りチェックシート」を使用しての授業参観、「児童の学び合いの様子から自身が学んだこと」を研究協議の柱としたことは、経験年数の若い教員にとってもわかりやすい参観の視点となった。

しかし、教科が算数に偏っていたことや、教員の「学び合い」そのものの理解が十分でないという課題があり、平成 30 年度も引き続き「学び合い」を中心とした研究に取り組むこととなった。

平成 30 年度の成果としては、①心理的不安の解消＝安心感、②関わり合いや人間関係の改善、③聞く習慣の形成、④意欲的な姿勢が教員から挙げられた。課題としては、①ジャンプ課題について、②学習規律、③考えない、④間違った方向に進むというものも挙げられた。①については、日々の実践と研修を積むことで、①以外については教師の授業での動き方に関するもので、子どもの学びの様子を見取る力をつけることで解決していきたいと考えた。

(2) 千代田小学校が目指す研究の方向性

本校の学校教育目標は、「よく学び 心豊かで たくましい児童の育成 かしこく(自信)やさしく(笑顔)たくましく(元気)」である。目指す児童像は「よく学び、心豊かでたくましい児童の育成」である。

児童の実態としては、「話す・聞くといった表現が乏しい」、「量や測定など、体験を伴って習得する領域が弱い」、「数学的思考ができない」といった学習面での課題がある。心の面での課題は、「自己肯定感が低い」、「やり抜く力が弱い」といった非認知能力に見られる。

平成 30 年度当初にとった児童アンケートから「わからなければ友達に聞く」や「友達のノートを見る」、

¹三重大大学教育学部において行われた第 49 回「学びの会」の岡野昇氏の講演、2019 年 2 月 7 日。岡野昇氏は、学びの共同体スーパーバイザーでもある。

「黒板や掲示物を見て考える」といった学習方略が身につけているという実態が浮かび上がった。その反面、「授業がわからないまま終わる」と回答した児童も多くいた。

そこで、令和元年度では、研究主題を「一人一人の学びを保障した授業づくり・学校づくり～学び合いを通して～」とし、授業での児童の様子を観察する力(児童が学んでいるか否かを判断する力)を身に付けていき、児童一人一人の学びの権利・機会を保障していこうと考えた。また、学校全体で取り組まない限り、授業を参観する機会も十分に確保できないということで、「学校づくり」という言葉も入れた。

学校教育目標と関連づけて今年の方角性をまとめるとすれば、以下のように言える。

主体的に学習内容や教材に関わり、見通しをもって最後まで学習に取り組める「たくましい」児童を育てていきたい。ジャンプの課題などで学習に挑戦する意欲を育てたり、聞けばわかるという安心感の中で落ち着いて学習に取り組ませたりしたい。

授業での課題や教科書や資料と関わり、他の児童と対話し、聴き合い、協同的に取り組む中で、学び合う関係ができ、認め合い、他の児童に対し思いやりの心がもてる「心豊か」な児童を育てたい。

そして、教科の特質を踏まえ、「見方・考え方」を働かせながら既存の知識を活用して学びを創り上げていける「よく学ぶ」児童を育てたい。

このような学びを実現していくことによって、「主体的・対話的で深い学び」ができる児童を育てていく。

(3)「学び合い」の意義と期待される効果

前述の通り、本校は平成 28 年度末より「学び合い」を中心とした授業改善を図る校内研修に取り組んでいる。本校では、麻布教育研究所学びの共同体スーパーバイザー 永島 孝嗣 氏と元茅ヶ崎市教育長 谷井 茂久 氏を指導者として招聘している。

「学びの共同体」とは、学習院大学教授 佐藤 学 氏が提唱している理念である。佐藤(2012)『学校を改革する』によると、学びの共同体の学校のビジョンを以下のように定義している。

学びの共同体の学校は、子どもたちが学び合う学校であり、教師たちも教育の専門家として学び育ちあう学校であり、さらに保護者や市民も学校の改革に協力し、参加して学び育ち合う学校である。(前著 P17 より)

さらに、学びの共同体の学校改革では、その実現のために以下の3つの活動システムで構成されているとしている。

- ①教室における共同的な学び
- ②職員室における教師の学びの共同体と同僚性の構築
- ③保護者や市民が改革に参加する学習参加

本校では、特に①②を中心とした授業研究に取り組んでいる。③については、本校では従前より「親子学習教室」として各学年が年に1度、保護者の学習参加を求める活動を行っている。

①教室における共同的な学び

前著によると、グループの学び、つまり協同的な学びがもたらすものとして4点挙げている。

- ・協同的な学びは学びの本質である。
- ・一人残らず子どもの学びの権利を実現するためには、協同的学びによって子ども同士が学び合うより他に方法はない。
- ・小グループの協同的学びが、学力の低い子どもの学力を回復する機能を発揮することである。
- ・協同的学びが、学力の高い子どもにも、より高い学力を保障することである。

「学び」とは、対象、他者、自己との対話による意味の編み直しであり、対話と協同によって実現しているとしている。

グループで学習することで、どの子も学びに参加することを余儀なくされる。学びの強制機能が「一人残らず」という上で重要である。また、前年度までの研修で「主体的に」という言葉の意味を「自分のペースで」という捉え方をするということを学んだ。その意味で、個別的な学習をする中でいつでもペアやグ

ループでつながることができることが、学びの保障にもつながり「一人残らず」学び続けることを実現していくということもできる。

実際の教室では、低学力の児童に対して、30～40人の学級を指導する際、従来のような教師の個別指導(机間指導)ではもはや不可能であり、児童同士での学び合いを求めた方が現実的であり、そのことは前年度までの授業参観による研修で明らかであった。

さらに、「ジャンプの課題」という高いレベルの課題への挑戦により、学力の高い児童への学ぶ機会の保障にもつながる。低学力の児童に対しても「ジャンプの課題」は有効で、発展的な学習から基礎的な内容を学ぶことができるとしている。むしろ、基本というものは応用する中でこそ、その大切さに気づけるということを、本校の教員は学んできた。

このような授業を行っていくと、対象との対話の中で、わからなくなると他の児童への「ねえ、ここはどうなっているの」や「ここがわからないから教えて」という会話が始まる。これが「学び合い」の第一歩となる。そこから、他者の求めに応じて、わかるように教えなければならない。その援助を受けて、自分の能力を超えた学びを実現することができる。これが教室における協同的な学び、つまり、教室での「学び合い」が期待される教育的効果である。

新学習指導要領で示されている「主体的対話的で深い学び」の実現という観点からも、上で述べたことと同じように解釈できる。

「主体的」とであるということは、自ら課題解決の方法をつかんでいて、それを使って学びに向き合っている状態である。また、「ジャンプの課題」などを通して、「もっと学びたい」と背伸びをしている児童を育てていくことも期待される効果である。

「対話的」は、すでに述べているように小グループでの学習活動から「聴き合う」関係を児童の中で構築していくことである。佐藤氏によると、「他者の声を聴くこと」は学びの出発点であり、対話的コミュニケーションで構成される民主主義の基礎であるとしている。

「深い学び」とは、前述の通り、「見方・働き方」を生かせる教科の本質に沿った学びのことである。佐藤氏は、そのことを「真正の学び」と定義している。永島氏は、校内研修の指導講評の中で「ジャンプの課題」をつくるポイントを「学術的に高い内容にする」としていて、このことも「深い学び」につながると考える。

②職員室における教師の学びの共同体と同僚性の構築

佐藤氏は、学びの共同体の学校改革の中心目的の一つとして、以下のように述べている。

一人残らず、教師が専門家として成長できる学校を築くことにある。この目的を達成するためには、すべての教師が同僚に授業を公開することと、授業研究会を通じて教師が学び合う同僚性を校内に築くことが必要である。(前著 P38 より)

そのことを実現するために、本校では、「一人一授業以上公開」での授業研究会を行い、その後、研究協議会を実施している。具体的な内容は、本紀要Ⅱ研究に関わる主な取り組み(2)ブロック研修の方法に示す。

本校が目指す研究の方向性と重複するが、本校では授業研究が中心となる学校を目指している。しかし、昨年度の反省からは「日頃のジャンプ課題の設定ができなかった」「グループやペアでの確認・演習ができない」という課題が挙げられている。そのためには、職員同士での「学び合い」が日常から行われていることが必要であると考えている。

校内研修では、新しく異動してきた職員に向けての「第0回校内研修」や「ジャンプ課題づくり」というテーマの研修を設定してみたり、授業の研究協議では全員が小グループに分かれ発言をしてみたりして、職員同士での「学び合い」が日常的に行われるようにして授業改善につなげていく。

③保護者や市民が改革に参加する学習参加

本校では、従前より親子で授業に参加し、授業を創り上げる「親子学習教室」を実施している。

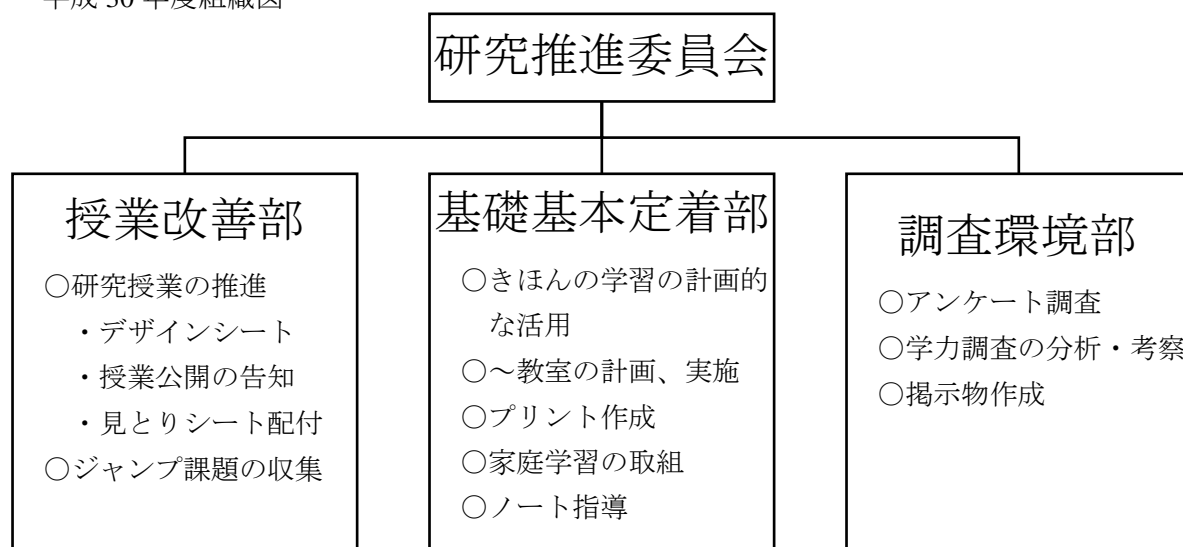
佐藤氏は、保護者の学習参加については、保護者の誰もが対等に学校づくりに参加でき、教師と保護者の信頼関係と保護者同士の連帯を形成するシステムを構築し、「学習参加」はそれを実現するシステムであるとしている。本校の「親子学習教室」もそのシステムに当たるのではないかと考える。

授業参観を「プロジェクト学習」の最終目標に位置づけることで、子どもたち同士が、その目標に向か

って学び合いながら活動に取り組む。そして、保護者にも授業参観での役割を求めることで、その学習が完成する。保護者の学習参加が児童の学びにつながるようにしたい。

3 研究組織

平成 30 年度組織図



各部の部長は、研究推進委員が務め、研究推進委員会の方針に従って進める。
各部には、研究推進委員をはじめとし、経験のある先生方に分散して担当してもらう。
研究部長は、各部の部長とは兼任せず、それぞれの部との連携・調整役として動く。

令和元年度は、上のような組織を作らず、研究推進委員会のみを作ることにした。理由としては、基礎基本の学習は大切であるが、学びの本質に迫るものではなく、各教科の一時間一時間の授業の充実を目指していきたいと考え、各部での活動をすることよりも、教材研究に時間を使う方がより有意義であると考えたからである。

4 研究の方法

(1) 令和元年度の研究課題について

- ・教科は自由で、全員が学び合える授業

(2) 研修の内容・方法について

①指導者 麻布教育研究所 永島孝嗣先生 元茅ヶ崎市教育長 谷井茂久先生

②全体学び合い研修

6月5日(水) 野崎教諭 中学年

10月2日(水) 八木原教諭 低学年

2月12日(水) 長島教諭 高学年

低・中・高それぞれ年1回(合計3回)

*算数以外で実施

*授業者は、千代田小学校在籍2年目かつ経験年数6年目以上から

かつ今までに全体への授業公開していない教員

(益田、坂田、島田、八木原、畑仲、佐藤、斎藤文、野崎、神田、吉田、長島、田中)

*指導者 永島 孝嗣先生(2回) 10月 2日(教委主催)

2月12日

谷井 茂久先生(1回) 6月 5日

③ブロックごとに月1回程度の公開授業

○全ての教員が1ヶ月に1回授業を見て学ぶ機会の保障

○見るグループを決めない。(初めての先生はグループを決めた方がわかりやすい)

→見方に関する研修を行う。

○20分程度の研究協議会をもつ。流れは全体研修と同様とする。

④第0回校内研修の実施 4月1日(月)9:30～ 学校運営委員会の同時刻に行う
(中心者:野崎)

目的:異動してきた方のために(足並みをそろえる)

○講義(異動者のみ対象)

○ビデオ研修(30年度の授業1本視聴)

- ・45分視聴
- ・グループ協議

⑤夏季研修

○ジャンプ課題をつくる。

○自分のテーマに沿った教科領域等の研修に積極的に参加し専門性を高める。

⑥他校の研修(学び合い)への参加

・6月28日(金)校内研修(佐藤学先生の講演) ※5時間授業

・教務主任から出張文書を紹介していただき、自分の行きたいものに立候補する。

最後に集まりすぎてしまうことは避けたいため、希望者がいなかった場合は教務主任から声をかけることもある。

⑦授業者は自分のテーマを決めて、1年間研修に臨む。

(例)・つまずきがでるジャンプ課題の設定

- ・どの子ども学びが続くジャンプ課題の設定
- ・子どもが学び続ける教材の工夫
- ・ペア学習を10回以上入れる授業
- ・支援が必要な児童を見極め、学びとつなぐ支援
- ・つまずきから展開させる授業
- ・わからないことが普通に言える学級経営
- ・間違いから学ぶ児童の育成

5 研究日程

(1)全体研修

4月9日(火) 学校研究の方針の提案・ヴィジョンの共有

8月28日(水) ブロック研修の進捗の確認・ジャンプ課題づくり研修

3月9日(月) 1年間の取り組みの振り返り

(2)校内授業研究会

R元年度 校内研修 授業一覧

授業日		名前	教科	児童	場所	授業日		名前	教科	児童	場所
4月23日(火)	中	野崎 智大	算数	3-3	3-3	10月29日(火)	低	湯浅 利美子	国語	1-2	1-2
5月21日(火)	高	吉田 亘	算数	6-1	6-1	11月12日(火)	中	齋藤 輝子	書写	3-2	3-2
5月28日(火)	中	田中 澄美	音楽	4-2	音楽室	11月19日(火)	低	高橋 順子	算数	2-1	2-1
6月5日(水)	中	野崎 智大	理科	3-3	3-3	12月3日(火)	高	曾志崎 弥生	国語	6-2	6-2
6月18日(火)	高	細野 愛	書写	5-1	5-1	12月4日(火)	中	齋藤 文子	理科	3-1	3-1
6月25日(火)	低	佐藤 香	音楽	2-2	2-2	12月12日(木)	低	坂田・益田	生活単元	なかよし	なかよし1
10月2日(水)	低	八木原 聖	国語	2-3	2-3	1月14日(火)	中	板倉 敏美	国語	3-2	3-2
10月4日(金)	高	中元 希琳	家庭科	5-2	家庭科室	1月21日(火)	低	神田 美香子	国語	1-1	1-1
10月8日(火)	中	島田 正恵	社会	4-1	4-1	1月28日(火)	高	関原 嘉紀	理科	6-3	6-3
10月15日(火)	高	畑仲 泰之	外国語	5-2	5-2	2月4日(火)	中	工藤 大輝	道徳	4-2	4-2
10月18日(金)	高	澁田 侑希	学活	6-2	6-2	2月12日(水)	高	長島 理史	道徳	5-3	5-3
						2月25日(火)	中	坂本 岳人	算数	4-1	4-1

Ⅱ 研究に関わる主な取組

1 学力向上指定校事業

文責 畑仲

はじめに

埼玉県は、平成 27 年 4 月から調査内容を一新した「埼玉県学力・学習状況調査」をスタートさせた。この調査の究極のねらい(目的)は、「各教育委員会の施策や各学校の指導」と「子供たちの学力」の関係を客観的なデータに基づいて分析し、より効果的な施策や指導を全県で共有することで、本県の子供たち一人一人の学力をしっかりと伸ばそうとするものである。

本校では、平成 30 年度、平成 31・令和元年度、県学調の結果を分析し活用するための調査研究協力校としての委嘱を受けた。本校では、校内研究とも関連させて取組をすすめた。

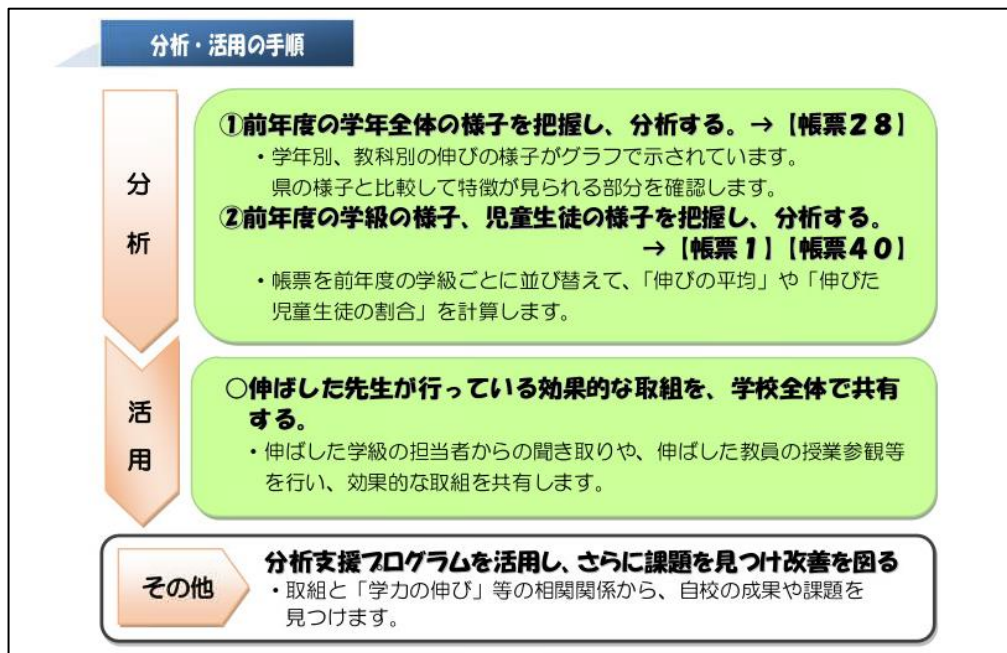
ここでは、その 2 年間で取り組んだことと、それらの成果と課題について述べていく

研究 1 年目(平成 30 年度)の取組

①埼玉県学力学習状況調査の分析・活用

研究に取り組むにあたって、本校児童の学力や非認知能力、学習方略の実態がどうなっているのかを把握するため、平成 30 年 4 月に実施した埼玉県学力学習状況調査の結果分析を行った。

分析・活用の手順については、埼玉県教育委員会(2019)『平成 30 年度埼玉県学力・学習状況調査報告書』p34 に示されている手順で行った。



本校で実施した分析は以下の 3 つである。どれも、後述の夏季研修会「埼玉県学力学習状況調査分析活用研修会」にて取り組んだ。

1 つ目は、【帳票 28】を使って前年度の学年全体の児童の学力の様子、学力の伸びを分析した。

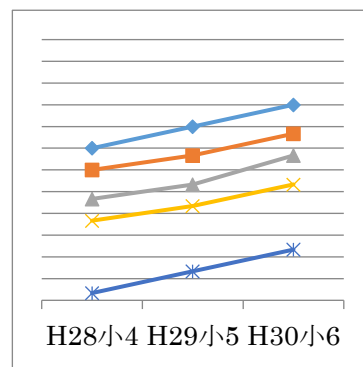
2 つ目は、【帳票 40】学力分析データを使って、学習能力、非認知能力を前年度の学級で並び替え、学級ごとの伸びを分析した。

3 つ目は、【分析支援プログラム】を使って、学力の伸びと関連が見られる項目を見つけ出し、昨年度の取組との関連を調べた。

(1)【帳票 28】の分析より

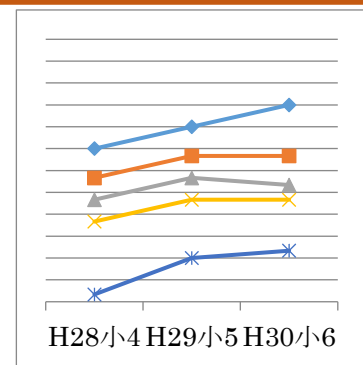
右図は平成 30 年度埼玉県学力・学習状況調査の、前年度の学年全体の学力の伸びがわかる【帳票 28】である。

右図①では平成 29 年度小5児童の国語の学力の伸びが分かるグラフである。ここからわかることは、どの階層にも伸びが見られることがわかる。とくに、学力最上位層の伸びの傾きが急であることがわかる。図では示さないが、本校児童の学力の状況、学力の伸びは埼玉県とほぼ同じ状況であった。



図①帳票 28 学力の伸びの状況 小6 国語

右図②は平成 30 年度埼玉県学力・学習状況調査での小6児童の算数の伸びの状況である。この【帳票 28】からわかることは、学力最上位層児童の学力は順調に伸びているが、学力中位層の児童の学力が伸び悩んでいるということである。



図②帳票 28 学力の伸びの状況 小6 算数

(2)【帳票 40】の分析より

本校では、前述の通り、学び合いによる共同的な学習に取り組んでいる。学び合いでは、以下のことを全校共通の取組として行っている。

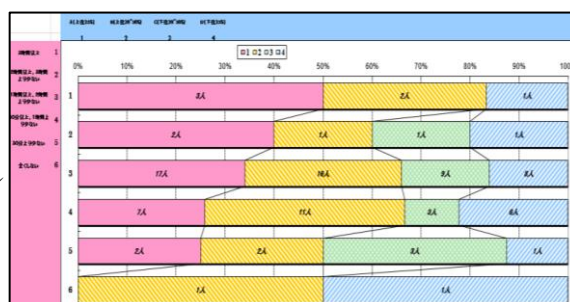
- ・分からない時に「教えて。」と聞ける子を育てる。
- ・ミニ先生ではなく、友だちの求めに応じ教えられる子、その人間関係づくりを構築する。
- ・「困ったら、聞く」というルールで、必要がある時に本人が求めて聞く形にする。

【帳票 40】を見ると、学習方略の1つである「人的リソース方略」が、小5で+0.5 ポイント、小6で 0.3 ポイント増えていることがわかった。「人的リソース方略」とは、友人を利用して学習を進める活動であるとしている。学び合いを推進していることによって、他者に聞いて解決しようとする児童の姿が増えてきたことが【帳票 40】からわかった。

一方で、学習方略の1つである「プランニング方略」は、小5で埼玉県、坂戸市の平均を下回っていることがわかった。「プランニング方略」とは、計画的に学習に取り組む活動としている。小6では県、市と同じ程度であることもわかった。

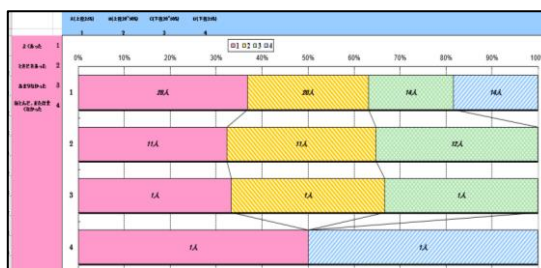
(3)【分析支援プログラム】の分析より

右図③は、【質問事項「学校の授業以外に、ふだん(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間勉強しますか」と【学力の伸びの階層 算数】のクロス集計である。当たり前のようであるが、時間が長いほど学力の伸びが見られ、関連が見られる。時間をかけて自主学習に取り組むと、学力の伸びが見られることもわかった。



図③【質問事項「学校の授業以外に、ふだん(月～金曜日)、1日あたりどれくらいの時間勉強しますか」と【学力の伸びの階層 算数】のクロス集計

右図④は【グループで活動するとき、一人の考えだけでなくみんなで考えを出し合って課題を解決すること】と【学力の伸びの階層 国語】のクロス集計である。どの階層でも、他の児童と考えを出し合う学習に取り組んだら学力の伸びが見られることがわかる。



前述の通り、教え合う関係でなく、わからないときには他の児童に聞く、聞かれた児童は求めに応じて答えるという「聴き合う」姿勢で授業に取り組んでいることから、クロス集計による関連が見られたのだと考える。

図④ 【グループで活動するとき、一人の考えだけでなくみんなで考えを出し合って課題を解決すること】と【学力の伸びの階層国語】のクロス集計

(4) 前年度の取組分析

【帳票 28】【帳票 40】【分析支援プログラム】の分析と昨年度担任の取組に関連性があるかを分析するため、平成 29 年度 5 年担任に 2 名を対象に聞き取りを行い、表計算ソフト(Microsoft 社 Excel)を使用して、学級別のデータを作成した。(平成 31 年実施の埼玉県学力学習状況調査では【帳票 42】として、前年度在籍クラスを基準とした伸びなどのデータが作成されている。)

<平成 29 年度 5 年 3 組について>

① 学力の伸び

	国語	算数
昨年度からの学力の伸び	3.2	-0.4
学年平均	2	1

② 学習方略、非認知能力の伸び

	AL	柔軟	プラン	作業	人的	認知	努力	自制心
結果	3.9	3.4	3.6	3.5	3.0	3.8	4.0	3.8
昨年度からの伸び	-0.2	0.0	0.0	0.1	0.2	-0.1	-0.3	-0.2
県平均	4.1	3.5	3.5	3.4	2.9	3.8	4.0	3.9

<平成 29 年度 5 年 1 組について>

① 学力の伸び

	国語	算数
昨年度からの学力の伸び	1.9	-0.1
学年平均	2	1

② 学習方略、非認知能力の伸び

	AL	柔軟	プラン	作業	人的	認知	努力	自制心
結果	4.0	3.5	3.5	3.4	3.2	3.9	4.0	3.9
昨年度からの伸び	-0.1	-0.1	-0.3	-0.2	0.4	-0.2	-0.2	-0.1
県平均	4.1	3.5	3.5	3.4	2.9	3.8	4.0	3.9

学年学級で取り組んだことの聞き取りや県学力学習状況調査結果分析から、以下のような考察を導き出した。

①自主学習ノート（さかろんノート）の取組

- ・ノート見開き左側に漢字や計算など基礎的な内容、右側には自分の興味をもった内容で提出させた。
- ・3組と1組ではおそらく、ノート提出回数が違っていた。おそらく、3組の提出回数が多い。1組は漢字、計算といった反復学習のような宿題が多かったようだ。国語の学力の伸びは3組が圧倒的に上回っている。

②視写の取組み（教材名『うつしまるくん』）

- ・自習や宿題で取り組ませた。『銀河鉄道の夜』など、長文視写もあった。両クラスとも、国語の記述式問題の正答率が県や市を上回っていた。

③学び合いの推進

- ・ほとんどの授業で、1グループ4人で机を並べ、必要なときには友だちと会話をしながら学習を進めた。
- ・3組と比べて、1組の方がグループで行う共同的な学習が多かったようだ。AL や人的リソース方略の数値は1組の方が高い。

(5)夏季校内研修 埼玉県学力学習状況調査分析

本校では、平成 30、31 年度、県学調の結果を分析し活用するための調査研究協力校としての委嘱を受けている。その一環として、平成 30 年 8 月 27 日に、本校にて表題の研修会を実施した。

①内容

- 1) 埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 志村 憲一 氏による講義
- 2) 平成 30 年度の県学調の結果を分析し、考えられる原因と対応策の検討
- 3) 平成 29 年度学力を伸ばした学年の取組について報告

②研修会の主な内容

- 1) 講義 「学校における学力向上 PDCA サイクルの確立に向けて」

志村氏より、県学調の分析について、全国学力学習状況調査の問題や誤答の分析、活用の仕方、「コバトンのびのびシート」の活用の仕方について講義を受けた。

- 2) 平成 30 年度の県学調の結果を分析し、考えられる原因と対応策の検討

協議の主な目的は「県学調の結果から、本校の児童にとって学力の伸びが期待できるものを見つけ、具体的な取組を考えること」である。以下に、協議の結果、各グループから出てきた主な取組について4点示す。

- ・褒められると伸びる児童が多くいることである。褒めるときは全体に、そして個別に褒める。さらに、褒めることを可視化することで、自己肯定感を高めることができると考える。また、クラスの中で褒められる機会を多くとり、自己有用感の向上を図ることも大切である。
- ・話の聞かせ方についてである。聞いたことを話すようにさせることや、聞いたことを友達にわかりやすく伝える場面を設定することが必要である。話の聴かせ方は「音声＋視覚＋内容＝話」となるように話をするのも話す側の工夫も必要である。
- ・学び合いを推進することである。やはり、みんなで考えを出し合って課題を解決する経験

をした児童の学力の伸びは高いことが分析の結果から明らかになった。遊びが上手な児童は学習方略の1つ「人的リソース」の数値が高いこともわかった。そして、言うまでもなく、落ち着いた学習環境で学習することが学力を伸ばす要因でもあるので、学び合いを通して、人間関係づくりも大切となってくる。

- ・家庭学習を推進することである。ノートやプリントを提出することの大切さを伝えて取り組ませ、引き続き継続して宿題を出す。そして、毎日、視覚化するなど、取り組みがわかる道具を活用すると、より児童にとってわかりやすくなる。

3) 平成 29 年度学力を伸ばした学年の取組について報告

前述の通り、昨年度の 5 年生（現在の 6 年生）の国語に伸びが見られたので、昨年度の担任から聞き取りを行った。主な取組としては、自主学习ノート（さかろんノート）、視写、学び合いの推進と学力の伸びに関連が見られることがわかったことを報告した。

(6) 研究課題・仮説の設定

上述の分析を踏まえ、平成 30 年度の研究課題・仮説を以下のように設定した。

研究課題（研究テーマ）

自ら学び 互いに高め合う児童の育成
～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

現状と課題を踏まえた仮説

- 児童の発達段階に合った学び合いの場の設定を工夫すれば、自ら学び合い高め合う児童の育成ができるであろう。
- 学び合いの授業を展開するとともに、基礎基本を定着させる環境設定をすることで、児童が安心して学力を伸ばすことができるであろう。

仮説をもとにした具体的手立てを以下のように講じた。

- 全国・埼玉県学力学習状況調査の活用（前述の通り）
- コバトンのびのびシートの活用
- 校内学び合い研修会の実施（ここでは割愛する）
 - ・研究授業を 1 人 1 授業以上行い、全 2 3 回、研究協議も行った。
- 「きほんの学習」の取組の推進
- レベルアッププリントの取組
- その他（解説は割愛する）
 - ・学期末 1 週間、算数補習週間を設け、低位児童に個別に指導した。

②コバトンのびのびシート

埼玉県では「コバトンのびのびシート」を以下のように示し、作成・活用を推進している。

県学調や市町村や学校で行っている調査等に加え、授業から把握できる伸ばしたいところを一元化して表示し、児童生徒の実態に応じたより効果的な支援方法を見出し、日頃の授業等における指導方法の工夫・改善に生かすことができ、次年度に引き継ぐことができるシート

本校でも、校内研修で4～6年生、各学級3名程度を抽出し、コバトンのびのびシートを作成した。抽出に当たって、条件は以下の通りである。

- ・学力中位層
- ・日頃からの努力が見られ、学力の伸びが期待できる
- ・担任がより細かく、他の教師と「見取り」を行いたい

作成後、学級担任と管理職や研究主任で抽出児童について、シートをもとに、現在の様子などを話し合った。後述する「レベルアッププリント」の進行状況も併せて、抽出児童については分析を行った。

④「きほんの学習」の取組の推進

本校では、朝の会前の業前に、授業時数に入れない学習活動として、「きほんの学習」に取り組んだ。

(1)朝学習計算プリントの実施

＜方法＞

朝の「きほんの学習」15分間の最初の時間を使って全学年計算プリントを実施。20問の問題を1分間計測して解く練習を積むことで、基礎計算技能の向上を図った。また、毎回カードに正答数やタイムを記録することで、自己の伸びや傾向をつかむことができるようにした。継続して行うことで、児童達は速く正確に計算する経験を積んできた。

また児童達の実態に合わせ、上の学年の計算プリントにも取り組ませることで、計算の幅を広げるようにしてきた。

プリントの内容例と記録カードに児童が毎回記録する内容は以下の通りである。

〈低学年〉



〈記録カード〉

日付	プリント番号	正答数	タイム
9/18	E3	18	1分

〈中学年〉

① $7 \times 3 =$	⑪ $9 \times 2 =$
② $7 \times 5 =$	⑫ $6 \times 5 =$
③ $4 \times 8 =$	⑬ $8 \times 7 =$
④ $2 \times 8 =$	⑭ $9 \times 6 =$
⑤ $7 \times 4 =$	⑮ $60 \times 4 =$
⑥ $6 \times 8 =$	⑯ $70 \times 3 =$
⑦ $9 \times 8 =$	⑰ $58 \times 2 =$
⑧ $9 \times 2 =$	⑱ $76 \times 4 =$

〈高学年〉

① $8 \div 4$	⑪ $93 \div 3$
② $45 \div 5$	⑫ $60 \div 5$
③ $18 \div 3$	⑬ $57 \div 3$
④ $64 \div 8$	⑭ $91 \div 7$
⑤ $42 \div 7$	⑮ $96 \div 6$
⑥ $24 \div 6$	⑯ $55 \div 11$
⑦ $30 \div 6$	⑰ $60 \div 12$
⑧ $54 \div 9$	⑱ $300 \div 10$

(2) 問題作りチャレンジの取組

各種学力調査の結果から、算数で文章問題を読むことにも課題があることがわかり、図⑥のような「問題作りチャレンジ」にも取り組んだ。自分で問題を作成することで、分かっていること、聞かれていることが何かをはっきりとさせることをねらいとした。

図⑥問題づくりプリント 低学年

図⑦問題づくりプリント 3～6年

⑤ レベルアッププリントの取組について

全国学力学習状況調査の結果分析により、本校の児童は基礎基本の定着に課題があることがわかった。そこで、基礎基本の定着を目指して、コバトン問題集、コバトン復習プリントを、朝学習の時間に取り組めるよう編集し、「レベルアッププリント」として実施した。

「レベルアッププリント」とは、平成30年度に実施した埼玉県学力学習状況調査、全国学力学習状況調査の結果より、本校の課題となる問題を、分かるまで繰り返し取り組み、学力の向上を目指す目的で実施したものである。プリントに番号を付け、全員がプリントを合格できるように取り組んだ

レベルアッププリントの取組については、以下の通りである。

- ・プリントには算数における4つの領域が示されている。
 - K→数と計算
 - R→量と測定
 - Z→図形
 - S→数量関係
- ・児童全員に進度表を配付し、100点になるまで取り組む。
- ・プリントには埼玉県学力学習状況調査でのレベルが付いている。
- ・採点は担任外の教務部が分担して行い、採点結果をその都度担任にフィードバックする。
- ・取り組むプリントは、1巡目は全員が同じものを取り組み、最終的には児童が合格していないプリントを選ぶことになる。

図⑧レベルアッププリント

実施していく中で、「問題のレベルが高すぎて、一部の児童にとって負担になっている」といった問題点が指摘された。そこで、「レベルアッププリント」の想定レベルと実際の県学調の児童のレベルの関係を調べ、各担任にフィードバックを行った。フィードバックした内容は以下の通りである。

- ・児童のレベルが想定レベルを下回っている問題は無理に解かず、ドリル学習などに代えること。
- ・児童のレベルを上回るプリントを合格している児童を伝え、それが児童の頑張りであること。
- ・個々の児童にとって合格しなければならないプリントがあること。

前述の「コバトンのびのびシート」と一緒に、上記のフィードバックを行った。そのことで、学級担任は指導すべき児童がわかったり、児童の伸びや頑張り把握したりして指導に生かすことができた。

また、実際の児童のチェック名簿を使って、上記のことを色分けや記号を使って示した。担任によっては、教務必携に貼り付けて指導に生かしていた。

研究1年目（平成30年度）の成果と課題

研究1年目のまとめとして、職員にアンケートをとった。成果(○)と課題(●)をまとめると以下の通りである。

- レベルアッププリントを活用することで、ひと工夫ある問題になれることができた。
- 本校の学校課題研究「学び合い」を通して、45分間学び続ける児童が増えた。
- 「学び合い」を通して、子どもたちの人間関係が良くなった。「できない」ことを恥ずかしいと思う児童が減った。
- 多くの授業研究を行うことで、子どもたち個々を知ることができ、「子どもの学ぶ姿から学ぶ」姿勢をもつようになった。
- 飾りでない「授業公開」「授業研究」を行い、研究協議は指導法を責めないスタンスで臨むので、教職員の人間関係が悪くならない。
- 人間関係が良好なクラスや職員室では、学び合いが成立し、若手教員が自分の指導法についてベテラン層に教えてもらったり、ともに教材研究をしたりする姿が見られるようになった。
- 「学び合い」の課題設定をするための教材研究の方法、時間の確保が必要である。
- 数多い授業公開に参加できるよう、人的支援や時間の確保をする必要がある。
- 「学び合い」と「学力向上プリント」の2本立てで進めていくので、やることが多く、時間がなくなる。
- 授業公開＆参観だけでなく、各研究部での取り組みがあり、そのために会議が多く設定される。

成果としては、児童は安心して学習に取り組むようになった、クラスの雰囲気よくなり、自分から学びに向かおうとするようになった、わからなければ友だちに聞いて解決するようになったといったことが挙げられた。

課題としては、「学び合い」の授業研究と「学力向上」のためのプリントの取組を両方行うことで業務を圧迫してしまうことが挙げられた。また、授業研究以外に、研究部での取り組みがあつて、会議が多く設定されてしまう結果、授業に必要な教材研究の時間が取れないといったような、負担が大きくなるという課題が挙げられた。

授業の質を高め、授業を通して児童の学力を向上させるには、業務の負担軽減とともに校内研修をもっとシンプルにして、焦点化させる必要が出てきた。

研究2年目（平成31・令和元年度）の取組

①学校教育目標・目指す児童像の再確認

研究2年目を迎えるにあたって、昨年度、研修疲れになってしまった実態を踏まえ、再度、目指す学校像や研修が目指す方向性を再確認する必要がある。

まず、以下に示すのが、佐藤(2012)『学校を改革する』p38の引用である。

一人残らず、教師が専門家として成長できる学校を築くことにある。この目的を達成するためには、すべての教師が同僚に授業を公開することと、授業研究会を通じて教師が学び合う同僚性を校内に築くことが必要である。

本校の学校教育目標は「よく学び、心豊かで、たくましい児童の育成」である。目指す児童像は「かしこくなかよく たくましく」である。また、今年度当初に校長が示した教育方針の中に、「高め合い・磨き合うやりがいのある学校づくりの推進」がある。

目指す児童像「かしこく・やさしく・たくましく」の「かしこく」を具現化するには、授業づくりと授業研究が業務の中心となる学校になるよう、学校づくりを進める必要があることを確認した。

また、教員の負担軽減を図りつつ、日々の授業の質を向上させていくことも上記の学校教育目標や目指す児童像に迫るためには必要であると認識し、研究の方向性を再度検討した。

上記の佐藤学氏の引用から、日々の授業づくり、授業研究会を学校の業務の中心となり、他の業務を精選していくことが、学校づくりへの最短アプローチであることも確認した。

②研究課題・仮説

上述の反省を踏まえ、平成31年・令和元年度の研究課題・仮説を以下のように設定した。

研究課題（研究テーマ）

一人一人の学びを保障した授業づくり・学校づくり
～学び合いを通して～

現状と課題を踏まえた仮説

- 児童の発達段階に合った学び合いの場の設定を工夫すれば、自ら学び合い高め合う児童の育成ができるであろう。
- 学び合いの授業を展開するとともに、基礎基本を定着させる環境設定をすることで、児童が安心して学力を伸ばすことができるであろう。

仮説をもとにした具体的手立てを以下のように講じた。

- 全国学力・学習状況調査の問題と結果の活用
- 埼玉県学力・学習状況調査の結果の活用
- コバトンのびのびシートの活用
- その他
 - ・校内学び合い研修会の実施・教育課程の見直し
 - ・朝学習時間の活用（「きほんの学習」「読書タイム」）
 - ・家庭学習の推進

③全国学力・学習状況調査の問題と結果の活用

国立教育政策研究所(2019)『全国学力・学習状況調査 解説資料』によると、調査問題作成の基本理念について、以下のように述べている。

調査問題自体が学校の教員や児童生徒に対して土台となる基盤的な事項を具体的に示すものであり、教員による授業改善や、児童生徒の学習改善・学習意欲の向上などに役立つとの視点が重要である。

また、上述の学力調査分析研修においても、埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 志村 憲一氏は、全国学力・学習状況調査の活用の仕方について、以下の3点を示している。

- 調査問題の分析・活用
- 学習内容定着の見届け
- 授業の改善・充実

そこで、本校では、6年生の正答率が全国平均に対して正答率平均が下回る問題を解いて、調査の内容を理解することと、問題出題の意図を理解し、自身の授業改善に生かすという2つのねらいで、全国学力・学習状況調査の分析を行っている。

分析の方法は、以下の順である。

- ①問題を解いてみる。正答だけでなく、誤答も考えてみる。
- ②正答、誤答例を確認し、問題出題の意図を理解する。
- ③自身の授業改善に生かせる内容を考える。

実際に行った内容は、以下の通りである。

①10:15~10:35

国語・算数の問題を解く。→各自で誤答分析→どんな正答・誤答になるかグループで確認する。

②10:35~10:50

答え合わせ&問題出題の意図の読み合わせ

※休憩 10分

③11:00~11:30

教科書を見ながら、出題された問題に関連する内容を見つける。教科書と付箋を活用し、2学期の教材研究をとって行う。

④埼玉県学力・学習状況調査の結果の活用・コバトンのびのびシートの活用

令和元年度の取組として、本校では「コバトンのびのびシート」を活用することに焦点化して取り組み、児童の見取りに役立てたり教師自身の授業改善に生かしたりしたいと考えていた。

そこで、埼玉県学力向上指定校事業の取組の一環として、埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 志村 憲一 氏を指導者として招聘し、「コバトンのびのびシート」の活用法について指導を受けた。以下に、その研修会の内容を示す。

<夏季校内研修 埼玉県学力学習状況調査分析「コバトンのびのびシート」の活用>

①内容

- 1) 埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 志村 憲一 氏による講義
- 2) 平成 30 年度「コバトンのびのびシート」抽出児童の学力の伸びの分析
- 3) 令和元年度「コバトンのびのびシート」抽出児童に対する手立ての協議

②研修会の主な内容

- 1) 講義 「学校における学力向上 PDCA サイクルの確立に向けて」

令和元年度も志村氏より、県学調の分析について、全国学力学習状況調査の問題や誤答の分析、活用の仕方、「コバトンのびのびシート」の活用の仕方について講義を受けた。

- 2) 平成 30 年度「コバトンのびのびシート」抽出児童の学力の伸びの分析

以下の方法で、昨年度抽出した児童について学力が伸びた要因などを分析した。

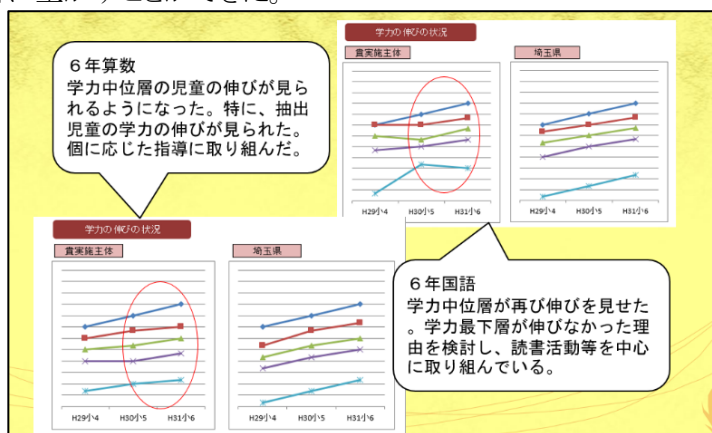
- ・昨年度担任を中心としたグループ（3名×6学級）を編成する。
- ・昨年度学級で取り組んだことを昨年度担任から聞き取る。
- ・抽出児童の学力を伸ばした要因について分析する。
- ・【帳票 40】も活用し、児童の学力を伸ばした学習方略や非認知能力も分析する。
- ・グループでの協議内容を、昨年度担任でない職員が全体で紹介する。

平成 30 年度では、学力の伸びが見られなかった「学力中位層」児童 3 名をコバトンのびのびシート作成抽出対象者とした。分析の結果、以下のような効果的な取組が指摘された。

- ・わからなかったら必ずグループの児童に聞くこと
- ・漢字、計算ドリルは最後までやること
- ・児童の見取りを充実させること（声を掛けなくても見取る）
- ・自主学習を奨励すること
- ・友達と協力して物事に取り組むこと

4～6年担任でなくても、児童の学力を伸ばした効果的な取組を共有することができ、2学期以降の授業改善や学級経営に生かすことができた。

学力中位層児童を抽出して「コバトンのびのびシート」を作成し、指導した結果の【帳票 28】は右の通りである。成果が見られる反面学力最下層への手立てに課題があることがわかる。



図⑨平成 31 年度実施埼玉県学力学習状況調査【帳票 28】

3) 令和元年度「コバトンのびのびシート」抽出児童に対する手立ての協議

令和元年度も各学級抽出児童を3名決定し、「コバトンのびのびシート」を作成して抽出児童への手立てを協議した。抽出児童を決定するためのテーマは「放っておくと見逃されてしまう児童」である。以下に、協議の手順とその様子を示す。

- ・今年度担任と昨年度担任でグループを編成する。(2～3名×8学級)
- ・今年度担任が抽出児童について様子を伝える。
- ・昨年度担任など、他の教師が昨年度の様子や効果的な手立てを伝える。
- ・今年度の支援方法について、今年度担任が全体に伝え、共有する。
- ・コバトンのびのびシートを完成させ、授業実践に生かす。



図⑩コバトンのびのびシート作成から活用までのイメージ

平成30年度と令和元年度での埼玉県学力学習状況調査の分析・活用の仕方が、職員の様子から違っているように見えた。恐らく、以下のような視点で職員は分析していたことが考えられる。

< 県学調を見るための視点の違い >

	平成30年度	令和元年度
帳票 28	学年全体を見る	伸びた学力層に注目
帳票 40	県や市との比較	児童一人一人で見ると
分析支援プログラム	伸びそうな要因を探す	「学び合い」との関連を見る
昨年度の取組	担任の取組を紹介	伸びた児童の要因と取組で紹介

平成30年度では学校全体の学力を広く見ていたのだが、令和元年度では児童一人一人を見ることに焦点化していたことが、夏季研修での教員の様子を見ていて感じられた。

⑥その他

本校が目指す学校像として、教師が互いに学び合う同僚性を築くことが挙げられる。

それを実現するために、教員の負担軽減を図りながら、授業づくりと授業研究が業務の中心となる学校にするために、校内学び合い研修会を実施し、円滑な実施のための教育課程に見直しを図った。

(1)教育課程の見直し

本校では、従前より会議や研修が多く設定され、それらが教材研究などの授業に係る業務を圧迫していることが課題であった。

そこで、次に示す方針で、教育課程、特に児童下校後に時間について改善を図った。

10	月			7		14	体育の日	21	生徒指導委員会	28	職員会議⑨
	火	1	ブロック研高④	8	ブロック研中⑤	15	ブロック研高⑤	22	即位の礼	29	ブロック研低⑥
	水	2	全体研修 授業研究会⑩	9		16	教育相談⑪	23	運営委員会⑫	30	(自然体験)
	木	3		10	(連合運動会)	17		24	報告職集	31	
	金	4		11		18		25		1	
11	月	4	振替休日	11	体力向上推進委員 会授業研究会	18	運営委員会⑬	25	生徒指導委員会		
	火	5	ブロック研中⑥	12	ブロック研高⑥	19	ブロック研低⑥	26	ブロック研中⑭		
	水	6	教育相談⑬	13	外国語活動授業つ くり研究会授業	20	市内授業研究会	27	入学準備委員会		
	木	7	市内音楽会	14	県民の日	21		28	報告職集		
	金	8		15		22		29			
12	月	2	職員会議⑯ ブロック研高の 授業参観123	9	運営委員会⑮	16	生徒指導委員会				
	火	3		10	ブロック研低⑰	17					

- ・毎週火曜日をブロック研実施日とする。
- ・ブロック研実施で発生する自習対応のため、火曜日に学習支援員の勤務を集中させる。
- ・ブロック研を実施しない学年は学年会として時間を活用できる。
- ・校内研修は年間5回（年度当初・年末に1回ずつ、学び合い研修会全体会3回）のみとする。
- ・研修、会議を減らし、他校の授業研究会、県・市主催の研修等への参加ができるようにする。
- ・空いた時間は成績処理、教材研究の時間とする。

図⑩平成31年度 千代田小学校教育課程 会議計画

具体的な研修の方法は、後述の「ブロック研修のやり方」にて示す。

(2)朝学習の時間の活用(読書タイム・きほんの学習)

平成30年度の職員対象の学校評価において、読書の時間として活用できる時間帯が必要であるという指摘があった。図書室蔵書の貸し出し冊数も年々少なくなってきたという実態もあった。

そこで、平成31年・令和元年度から、毎週木曜日に設定されていた「きほんの学習」(詳しい内容は、平成30年度の取組に記載)を隔週設定にし、残りの隔週で「読書タイム」という朝読書の時間を設定することとなった。

児童が好きな本を読むだけでなく、学校応援団の一部である「読書ボランティア」による読み聞かせもこの時間帯に設定し、年間通して読み聞かせの活動を行ってもらえるようにした。

「きほんの学習」についても、研究推進委員会にて、運用方法の検討を行った。年間18回しかなく、年間通しての取組が難しくなってきたことが、検討を行った理由である。検討の結果、運用方法は以下ようになった。

- 基本的には学級担任裁量の時間である。
- 配付物やアンケートなどが授業時間を圧迫させないように、この時間で行う。
- 「レベルアッププリント」や「問題作りチャレンジ」など、昨年度の取組で行っていたことも実施できる。
- 体育のグループの話し合いなど、運動時間確保のためのマネージメントや学級会の準備などもこの時間で行ってよい。
- 進め方のわからない教員（特に経験年数の若い教員）は、学年教員などに進め方を聞き、自分で児童のために時間を活用できるようにする。

授業の質を高めるために活用できると、担任教師からは好評であった。配付物やアンケート、それら自体を減らすことも同時に検討していかなければならないこともわかった。

(3) 家庭学習の推進

本校と千代田中学校・南小学校の千代田三校では、基本的な生活習慣の定着や学習時間の確保、家族団らん時間の推奨のために、平成24年度から下記のような趣旨で「家庭学習チャレンジ週間」と「ノーテレビ・ノーゲームデー」に共に、取り組んでいる。以下、「ノーテレビ・ノーゲームデー」の家庭配付文書の原文である。

昨今の情報メディアの発達により、子ども達がテレビ視聴やゲームに興ずる時間が大変長くなっています。その結果、生活の乱れや睡眠不足の原因につながっており、子ども達の生活を改善するためのよい方法はないかという声は、以前から保護者の皆様や教職員から聞こえていました。

そこで、「ノーテレビ・ノーゲームデー」を小学校と中学校が協力して取り組み、よりよい生活をつくる機会にしたいと考えました。そして、この取り組みによって生み出された時間が、親子のふれあい（家族の語り、お手伝い、読書や読み聞かせや家庭学習）につながることを願い提案いたします。

実施時期は、中学校の期末テスト前1週間とし、千代田中学校が実施期間を提案している。

また、それと合わせて、家庭学習を推進するために、「家庭学習チャレンジ週間」を実施している。

実施のねらいとしては、家庭学習の仕方を児童が理解し、家庭での学習の習慣を身につけることである。

具体的な実施内容は以下の通りである。

- ①家庭学習計画書を作る。1～3年生は家庭で保護者と、4～6年生は学級活動で作成する。
- ②計画に沿って、家庭学習に取り組む。
- ③児童と保護者の感想を記入して提出する。
- ④実施期間の原則金曜日は、ノーテレビ、ノーゲームに取り組む。金曜日が無理な場合には、他の曜日に変更して行う。

令和元年11月実施の「家庭学習チャレンジ週間」の結果から、家庭学習の時間の目安を、学年×10分とし、「時間いっぱいできた」児童の割合は88%となった。「ノーテレビデー」が「できた」と答えた児童の割合は84%だった。家庭への呼びかけを続けた結果、取組に協力してくれる家庭が増えている。

研究 2 年目（平成 31・令和元年度）の成果（○）と課題（●）

- ①学び合いの取組での成果と課題
- まずは教材（課題）と向き合う児童が増え、授業中が静かになってきた。他の児童に聞く時の声も小さくなってきた。
 - わからないときは他者に聞く習慣が付き、何もしていない児童はいなくなった。
 - 教師は学習が停滞している児童を見つけられるようになり、必要な支援を行うことができたようになった。
 - 教師は、自信の授業改善のために、研修に積極的に参加するようになった。自分から出張を選択し、研修に参加している。
 - 授業参観が日常化しているが、マンネリ化しつつある。テーマを決めて参観できるようにしたい。
 - 発展的な課題を設定するための教材研究をする時間がもてない。教師の負担を軽減し、質の高い授業ができるための教材研究の時間がとれるように会議、研修等の時間をさらに工夫したい。
- ②家庭学習の推進
- 家庭に協力を呼びかけ、家庭学習に対して意識を高めさせることができた。
(アンケート結果「目標時間通りにできた」88%「ノーテレビノーゲームができた」84%)
 - 自主学習ノート 4 冊を終了する児童もいて、児童の間で競って取り組む姿も見られた。
 - 家庭学習の内容がマンネリ化しつつある。家庭学習の内容をもっと紹介していきたい。
 - 家庭に対して、学校での「学び合い」による授業実践、家庭に協力してもらいたいことを発信する場がない。保護者会、PTA 総会などを使って、積極的に情報を発信していきたい。

平成 31 年度実施「埼玉県学力学習状況調査」の結果は次の通りである。



また、学力向上指定校事業としての効果検証をまとめると、以下の通りである。

- ・5年算数では、5-A から7-C へとレベルが4（県平均は3）上がった。児童をよく見て、個に応じた指導を行ったことや、家庭学習を推進したことなどが効果的だった。
- ・学力を伸ばした児童の割合がすべて県平均を上回った。5年算数は80%以上の児童の伸びがあった。上述の通り、児童一人一人をよく見るために、校内研修を充実させたりコバトンのびのびシートを活用したことが効果的だった。
- ・学力分析データの「AL」の数値は4、5年生で県平均を0.2上回り、協働的な学習に取り組んでいることがわかった。また、人的リソース方略はどの学年も0.2以上上回り、「わからないことを他者に聞く」姿勢が身につく、主体的対話的に授業で学んでいる様子がわかる。
- ・「家庭学習チャレンジ週間」の結果から、家庭学習の時間の目安を、学年×10分とし、「時間いっぱいできた」児童の割合は88%となった。「ノーテレビデー」が「できた」と答えた児童の割合は84%だった。家庭への呼びかけを続けた結果、取組に協力してくれる家庭が増えている。

授業研究・授業参観の日常化がだいぶ定着し、授業を参観し、教師が児童を見る力を向上させる授業研究が充実してきている。同僚性が高まり、日頃の授業から授業を見合うことが習慣化されてきている。

しかし、行事の精選や教育課程の見直し、教師の業務削減など、児童のために使える時間を増やし、その結果として授業の質を高めるためには、まだまだ見直さなければならないことがある。

本校の教育方針「高め合い・磨き合うやりがいのある学校づくりの推進」のために、研修を深めていき、学び合う教師を支えられる学校づくりを推進していきたいと考えている。

埼玉県学力学習状況調査は、本校の学力が目指す学校像に対して現状がどうなっているかを見るための羅針盤としての役割を果たし、授業改善に取り組む私たちの学校を支えてもらえるものとして、今後も分析・活用を続けていきたいと考えている。

最後に、本研究委嘱を通して、本校に2度も訪問していただき、本校職員が研修で学ぶ様子を温かく見届け、賞賛し、我々に研究に取り組む意欲や、研究の方向性を示唆して頂いた、埼玉県教育局義務教育指導課指導主事 志村 憲一 先生、西部教育事務所学力向上推進担当 指導主事 久保田 慶一先生、守岡 信一先生、本研究に取り組む機会を本校に与えて頂き、温かく見届けて頂いた、坂戸市教育委員会 教育長 安齊 敏雄 先生を始めとした坂戸市教育委員会の諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

(2) ブロック研修の方法

文責 野崎

①計画について

年度当初の研究推進委員会で以下のように研修計画を提案した。

①1人1授業以上

※なかよし・教務は（高：畑仲、曾志崎、中：田中、斎藤輝、低：益田、坂田）として、ブロック研修を行う。

②公開授業の教科領域等は問わない。

③協議の視点は「子どもの姿から学んだこと」とし、教員の見る力を養う。

④ブロックの研修後、研究協議をもち、時間は20分程度とする。

⑤最低限参観する授業は同じブロックの授業。ただし、他のブロックでも参観は自由。

⑥授業後に学んだことを「3行レポート」として残す。

②ブロック分けについて

今年度は、昨年度と同様に、ブロックを低学年、中学年、高学年に分け、特別支援学級・教務部はそれらのグループに分かれて所属することにした。各ブロックの人数は、7～8人にし、授業を見る回数と、授業で学んだことの交流の際の多様性を確保した。

③研究協議について

それぞれのブロックで月1回の授業研究会を行い、放課後に、研究協議会を開いた。そこでは、全員が子供のように学んだことについて発言し合うことで、教員同士の学びを深めた。詳しく言えば、児童の学びが深まったところや停滞したところを見る力であり、教師の発問タイミングや問題提示の適切さ、児童への関わり方等を考え、自身の授業力へと繋がる学びとするように努めた。

④3行レポートについて

それぞれが学んだことを3行レポートに記録しておき、年度末に紀要にまとめた。

⑤その他

それ以外に、ブロック研修の回数を確保するために、年間行事予定表の中に、ブロック研修の日程をあらかじめ位置づけた。主に火曜日に行うことにして、その日には、会議を入れないようにした。また、心得として、以下のことを挙げた。

・子どものことを信じ、敬意をもって接しよう。

→できていないのを子どものせいにしても始まらない。子どもの困っている感から自分たちができることを考え、子どもの良さを見つけていこう。

・教材研究をして、真正の学びの追究をしよう。

→毎週火曜日の活用をし、授業の課題づくり、資料集め等の授業の準備をしっかりとしよう。

・困ったときは助け合おう。

→何かあっても助け合える職員間の関係をそのまま子どもたちにとっての良い手本にしよう。

テーマ：主体的に友だちとのかかわり方、やりとりを引き出す

なかよし学級1組・2組 生活単元学習デザインシート

日時 令和元年12月12日(木) 第1校時
場所 なかよし1組教室
授業者 MT 益田 佳代子 ST 坂田 俊行

1 単元名 ボウリングに行こう

2 授業者の思い

本学級の児童は、明るく人懐こい児童が多く、学級内ではお互いに仲良く遊んだり、助け合って活動したりしている。学校生活では、教師や友だちの支援を受けたり、周りの様子を見て同じように行動したりすることができる児童もいる。

ボウリングについては、今までに経験している児童が多くゲームそのものは困難なくできると思われるが、勝敗にこだわったり自分中心の行動をしようとしたりすることも考えられる。そこで、みんなが楽しく体験学習ができるよう約束を決めたり、お互いに教え合ったりする大切さを学んでほしい。語彙の不足や社会性の未熟さからコミュニケーションがとりづらい児童も多いが、できるだけ全員が主体的に学習に取り組めるようにさせたい。

また、切符の買い方や電車、レストランでのマナーなども学習し、人との関わりの楽しさを知り、今後の自立や余興活動へとつなげていきたい。

3 本時の目標

- ・体験学習の流れを知ることができる。
- ・みんなで協力し、約束やマナーについて話し合ったり知ったりすることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

① 社会体験学習の約束について考えよう。

2 画像や動画を見て、当日の流れを知る。

3 2グループに分かれて約束を話し合う(電車、ボウリング場、レストランなど)

4 1年生は、切符を買う練習をする。

第1学年1組 国語科デザインシート

令和2年1月21日（火） 第2校時
場所 1年1組教室
授業者 神田 美香子

1 単元名 ものの名まえ

2 授業者の思い

本単元では、初めて、日々の生活の中で、無意識に使用しながら自然に習得している語句に光を当て、一つ一つの物の名前やまとめた名前を意識して学習する。「おみせやさんごっこ」の活動を通して体験的に言葉について考え、理解させることをねらいとしている。

本学級の児童は、「ことばを見つけよう」では、意味を考えながら文を作って、言葉遊びを楽しむことができた。

本時では、身の回りにあるいろいろなものの名まえを集め、上位語と下位語に分類し図や表に表し、視覚的に上位・下位概念を理解させていきたい。また、友達と交流することで、上位語と下位語の違いと使い分けについて、より正しく理解を深めさせていきたい。

3 本時の目標（本時 2／6時間目）

- ・上位語と下位語のちがいと使い分けについて、正しく理解することができる。

学習のデザイン	
1	口の体操をする。
2	前時の復習をする。
3	本時の課題の確認をする。
	⑧ 一つ一つの名まえと、まとめてつけた名まえをあつめよう。
4	一つ一つの名まえとまとめてつけた名まえを探す。
5	集めた言葉を発表する。
6	ふり返りをする。

個人テーマ：子どもの学びが続く課題の設定

第1学年2組 国語科デザインシート

令和元年10月29日(火)第2校時

場所 1年2組教室

授業者 湯浅 利美子

1 単元名

ことばを見つけよう

2 授業者の思い

本單元では、言葉の中に隠れた言葉を見つける活動を通して、「言葉は、文字が集まってできたものであり、文字を組み合わせると意味のある言葉になる」ということに気づくことをねらいとしている。「えをみて はなそう」「ひらがな あつまれ」で文字の組み合わせの中から言葉を見つける学習をした。この繰り返し学習を活かしながら本單元につなげていきたい。

本学級は、平仮名や片仮名、漢字の文字を学ぶことに意欲的な児童が多い。また、ペア音読ではお互い寄り添いながら読み合うことができる。

本時では、前時に一つの言葉の中から、意味のある別の言葉を見つけたり、言葉遊びの文を読んだりを想起し、自分で文づくりを行う。言葉の意味を考えながら文を作り、友達と交流することで、新たに言葉の使い方の理解を深めていきたい。

3 本時の目標(本時 2/2時間目)

文字を組み合わせると意味のある言葉になることに気づき、文を作ることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

④ べつのことばがかくれている文をつくろう。

2 前時の確認をする。

3 「ーがいる。」「ーがある。」という文を作る。

4 全体で共有する。

5 本時の振り返りをする。

個人テーマ： 解りやすく、楽しく学び続けられる授業づくり

第2学年1組 算数科デザインシート

令和元年11月19日(火) 第2校時

場所 2年1組教室

授業者 高橋 順子

1 単元名 九九をつくろう

2 授業者の思い

前単元では、「1つ分の数」のまとまりがいくつ分あるかを捉えながら乗法の意味を学習した。また、5 2 3 4の段の九九の性質や構成(かける数が1増えると積は、積はかけられる数分だけ増える)をアレイ図など活用して理解してきた。

本時では、6の段の学習の一回目だが、既習事項「1つ分×いくつ分＝全部の数」を基に、ジャンプ問題に取り組ませたい。6の段の九九を自分たちで工夫して作り、ペアの友だちに自分の考え方を伝え、九九の性質の理解を深めさせたい。また、分からないときは、進んでペアで助け合い子どもたち自身で問題解決ができるよう声掛けしていきたい。

3 本時の目標(本時 1 / 17 時間目)

既習の段(5, 2, 3, 4)の学習を生かし、ジャンプ問題を解くことができる。

学習のデザイン

1 2、3、4、5の段の九九を全体などで暗唱する。

今まで習った九九の性質の確認をする。

2 本時の課題を確認する。

⑥

かけざんを考え方をつかってもんだいをとこう。

3 ワークシートを配る。

4 各自で工夫しながら問題に取り組む

5 ペアで考え方を話しあう。

6 発表

7 まとめ

個人テーマ：一人一人、自分の考えをもち、人に伝えることができる子を育てる。

第2学年2組 音楽デザインシート

令和元年9月24日(火) 第2校時

場所 2年2組教室

授業者 佐藤 香

1 題材名 ひょうしをかんじてリズムをうとう

2 授業者の思い

児童は、聴取した曲の感じに反応して身体を動かしたり、知っている曲を聴くと楽しそうに歌詞を口ずさんだりと、感覚的に反応している。また、音楽活動に対し、意欲的に楽しそうに取り組む姿も見られる。しかし、感受したものを表現するのが苦手な児童もいる。ここでは、リズム学習として課題のつながりを大切に、拍の流れや拍子を感じ取りながら、簡単なリズムづくりやリズム演奏が一つの合奏の中に生かせるような形に結びつけたい。また音楽活動の中でも、分からないことは、自分から進んで友達に聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができるよう、ペアでの活動時間を十分に取、学びが深まることを意識している。

3 本時の目標 (6/9)

●拍子を感じ取りながら、リズム伴奏にのって 歌ったり演奏したりする。

学習のデザイン

1 前時までの学習を振り返る。

- ・2拍子の拍の流れを感じ取りながら、リズム譜を見て、手拍子や打楽器で演奏する。

2 本時のめあてを確認する。

歌をドレミでおぼえたら、けんばん1と2に分かれてひきましょう。

- ・旋律を階名暗唱する。

3 鍵盤楽器1、鍵盤楽器2の旋律をそれぞれよく練習する。

- ・手を置く位置や運指をよく確認する。

4 分担奏する。

5 本時の振り返りをする。

第2学年3組 国語科デザインシート

令和元年10月2日(水)第5校時

場所 教室

授業者 八木原 聖

1 単元名 音読劇をしよう 『お手紙』

2 授業者の思い

本学級の児童は読書が好きで、読書タイムになると本の世界に入り込み、それぞれが夢中になって読書を行っている。

学習の様子では、積極的に学習に参加する児童がいる中、他の児童の発言を黙って聞くだけであったり、他の児童の発言に集中が向けられなかったりする児童もいる。

本単元では、登場人物の心情を表すような音読劇にしたい。そのために、何度も本文を読ませ、登場人物の心情を考え、交流させながら自分の読みを深めさせたい。

3 本時の目標(本時 2 / 12時間目)

かえるくんの心情を考えることができる

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

問

なぜ、「ふたりとも」かなしい気分なのでしょう。

課

かえるくんの気持ちを考えよう。

2 範読 1の場面

3 音読 1の場面 読み終わったら 気持ちが分かるところに線を引く 終わったら、隣の友だちは、どこに線を引いているか見せてもらう。自分と違ったら、なぜか考えてみる。

4 黙読 自分で線を引いたところや、他の児童が引いた線のところに注目し、黙読をする。

5 問題に対する考えを記述する 早く終わったら、隣の児童がどんな考えを書いているか見たり、自分の考えや、隣の児童の考えを頭に入れて黙読をしたりする。

6 友だちと考えを伝え合う 隣の児童と顔を近づけ、小さな声で伝え合う。

7 全体で問題について交流する なぜ「ふたりとも、」なのか、考えを伝え合いながら、一の場面の読みを深める。自分の考えを話したり、他の児童の意見に対して話したりと、児童の考えをつないでいく。

8 黙読 自分の考えを話したり、他児童の考えを聞いたりして感じたことを振り返る、まとめの読みとする。

9 感想を記述する 本時の授業を行っての感想を記述する。

第3学年1組 理科デザインシート

日時 令和元年12月4日(水) 第4校時
授業者 齋藤 文子

1 単元名 明かりをつけよう

2 授業者の思い

本単元では、豆電球と乾電池などのつなぎ方と乾電池につないだ物の様子に着目して、電気を通すときと通さないときのつなぎ方を比較しながら調べる活動を通して、電気の回路についての考えを持つことができるようにすることをねらいとしている。

本学級の児童は、様々なことに関心を持ち、興味をもって学習に取り組む児童が多い。特に、理科の実験には意欲的である。前単元の「風やゴムで動かそう」では、グループの友達と協力しながら距離を測り、風やゴムの力で物が動かせることを学ぶ姿が見られた。

そこで、本時では身の回りにある物を回路の途中につなぐことで、電気を通す物と通さない物があることに気付かせたい。たくさんの実験をすることにより、比較・分類しながら差異点や共通点を考えられるようにする。また、金属でできていても表面の塗料を剥がさないと電気を通さない物を意図的に含めることで、製品名や外見だけで判断するのではなく、材質の違いに目を向けて調べるという見方や考え方を育てたい。

3 本時の目標 (本時 3/6時間目)

身の回りの物には、電気を通す物と通さない物があることを捉えることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

① どんな物が電気を通すのだろう。

2 回路ができているか確認する。

3 調べる物が電気を通すかどうか予想を立てる。

4 回路につないで実験する。

5 電気を通す物と通さない物を分類し、まとめる。

6 本時のふりかえりをする。

第3学年2組 国語科学習指導案

令和2年1月30日(木)

第2校時 3年2組教室

授業者 板倉 敏美

1 単元名 考えの進め方をとらえて、科学読み物を紹介しよう

教材名「ありの行列」

2 児童の実態と本単元の意図

(1) 児童の実態

本学級は、本を読むことが好きな児童が多く、読み始めるとすぐに本の世界に入り、どんな本でも楽しく読むことができる児童が多い。物語文では、少しずつ簡単な接続語や理由をつけて考えや感想を書くことができるようになってきた。一方で、これまでの学習で扱った「こまを楽しむ」、「すがたをかえる大豆」などの説明文では、段落ごとに中心となる語句を見つけるのが難しく、自分の考えをもてない児童が数名いる。また文章の中で接続語や指示語の役割を意識して読んでいる児童も少ないのが現状である。そのため、多くの接続語や指示語にふれ、中心となる語句を抜き出す活動をすることで、文章を正しく理解しながら読む力が必要である。

(2) 教材について

本教材では、「なぜ、ありの行列ができるのでしょうか」という「問い」から「答え」に至るまでを、接続語や指示語、それぞれの段落の大事な言葉や文を見つけ、段落相互の関係に注意しながら文章を正しく読み取る力を高めることをねらいとしている。これまでの教材の中で、三年上「こまを楽しむ」では、「問い」と「答え」を捉えて、まとまりに気を付けて読む学習を行った。また三年下「すがたをかえる大豆」では、文章全体の組み立て方、段落ごとの書き方、文の書き方に注意しながら読む学習を行った。本教材「ありの行列」は、「問い」「実験・観察」「研究」「答え」という文章構成になっており、これまでの説明文と違い、観察・実験を行い、仮説・推論を立て研究を深めるといった論説的要素を含んだ説明文となっている。これまでとはちがう論の進め方になっているが、論理展開が非常に明確である。また、誰もが目にする「あり」を題材にしているため、児童にとっては身近で興味を持って取り組むことができる内容になっており、親しみながら学習できる教材である。

(3) 指導について

単元の指導にあたっては、まず初発の感想を書いた後、科学読み物について知り、家族や友達に紹介する文章を書くという単元のゴール設定を行う。また接続語と指示語の言葉の意味や、実際に本文中で接続語や指示語がどんな使われ方をしているのかおさえておくことで、接続語や指示語を手がかりに段落ごとに書かれている内容を読み取る活動を行っていく。活動の中で、実際に多くの接続語や指示語にふれることで、接続語や指示語が正しく文章を読み取るために大きな役割を果たしていることに気づかせたい。本文を一通り読み進めた後は全体の論の進め方を考え、科学読み物が「問い」から「答え」に至るまでどんな構成で進められるのかおさえていきたい。そして最後にありの行列の文章を使って紹介文を書く活動を行う。文章の内容を適切に引用したりまとめたりできるように紹介文の書き方から指導していきたい。

3 単元の目標

- 紹介するために、文章の内容を適切に引用したりまとめたりすることができる。
- 実験と考察に注意しながら各段落の内容を読み取り、論の進め方を適切にとらえることができる。
- 指示語や接続語には、文章の論理的な関係を作る働きがあることを理解することができる。

4 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	○科学的な内容の本や文章に興味をもち、進んで読もうとしている。
読む能力	○「問い」から「答え」に至る実験と考察を読み取り、論の進め方を捉えている。((1)イ) ○文章構成を踏まえて、内容を簡潔にまとめている。((1)エ) ○科学読み物を読んだ感想を交流し、友達と自分の捉え方に違いがあることに気づいている。((1)オ)
言語についての知識・理解・技能	○指示語と接続語に着目し、文章の論理構成を捉える手がかりとしている。((1)イ)

5. 指導と評価の計画（全7時間 本時 3／7）

次	時間	学習活動	評価基準と評価方法
1	1	<ul style="list-style-type: none"> ・科学読み物について知り、友達や家族に紹介する文を書くという学習の見通しを持つ。 ・ありについて知っていることを出し合った後、「ありの行列」の読み聞かせを聞いて初発の感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・科学読み物について知り、これからの学習に興味を持っている。【発言・観察】 ・初めて知ったことや不思議に思ったことについて自分の考えをまとめている。【発言・ノート】
2	2 ～ 4	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめ」、「中」、「おわり」に気をつけながら本文を9つの段落に分ける。 ・「問い」と「答え」に着目して各段落の内容を捉える。 ・指示語や接続語、文末表現に着目し、論の展開を押さえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「問い」から「答え」に至る過程を論の展開に即して読み取っている。【発言・ノート】 ・論の展開を捉えるために、中心となる文を捉えている。【発言・ノート】 ・文章中に使われている指示語や接続語の働きを理解している。【発言・ノート】
3	5 ～ 7	<ul style="list-style-type: none"> ・ありの行列について、内容をまとめ、自分の感想と合わせて紹介する文を書く。 ・友達や家族に紹介をする。 ・学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介するという目的のために、適切に内容をまとめている。【発表・ノート】 ・感想を交流し、一人一人の捉え方の違いに気付いている。【発言】

5 本時の学習指導（3／7）

- (1) 本時の目標 「初め」「中」「終わり」の組み立てや「問い」と「答え」に基づいて、3、4段落の内容を捉えている。
- (2) 評価規準 ○「問い」から「答え」に至る過程を論の展開に即して読み取っている。
○論の展開を捉えるために、中心となる文を捉えている。

(3) 本時の展開

学習段階と発問 (●)	学習活動 (◎) と児童の反応 (△)	留意点 (※)・評価と手だて (・)
<p>1 めあてを確認する</p> <p>●めあてをノートに書きましょう</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">つながりに気を付けて、3・4段落の中で一番大事な文を探そ</p> <p>◎めあてをノートに書く。</p>	<p>・写し終わった児童は、次に音読をするため、その準備をさせておく（教科書を開いて待つ）。</p>
<p>2 音読</p>	<p>◎全体で音読する。</p>	<p>・音読する姿勢に注意する。 (本を立て、背筋を伸ばす)</p>
<p>3 第3段落</p> <p>●第3段落の中で、一番大事な文はどの文なのか探しましょう。</p>	<p>◎3段落だけを音読する。</p> <p>◎自分が一番大事だと思う文を探し、理由も考える。</p> <p>①自分で読む</p> <p>②サイドラインを引く</p> <p>③理由を書き込む</p> <p>◎ペア、グループで意見を聞き合う。</p> <p>△不思議なことに、その行列は、初めのありが巣に帰るときに通った道筋から、外れていないのです。</p> <p>△初めに、ありの巣から少し離れた所に、一つまみの砂糖をおきました。</p>	<p>・論の展開を捉えるために、中心となる文を捉えている。【発言・ノート】</p> <p>・3段落の内容をもとに発表できていることを褒める。</p> <p>※実験結果の書いてある文を押さえていく。</p>
<p>4 第4段落</p> <p>●第4段落の中で、一番大事な文はどの文なのか探しましょう。</p>	<p>◎4段落だけを音読する。</p> <p>◎自分が一番大事だと思う文を書き出し、理由も考える。</p> <p>◎ペア、グループで意見を聞き合う。</p> <p>△次に、この道筋に大きな石を置いて、ありの行く手をさえぎってみました。</p> <p>△すると、ありの行列は石のところで乱れて、散り散りになってしまいました。</p> <p>△ようやく、一匹のありが、石の向こう側に道の続きを見つけました。</p>	<p>・論の展開を捉えるために、中心となる文を捉えている。【発言・ノート】</p> <p>・4段落の内容をもとに発表できていることを褒める。</p> <p>※実験結果の書いてある文を押さえていく。4段落は文章を引き抜くだけでなく、まとめる。</p>
<p>5 まとめ</p> <p>●1から4段落までの一番大事な文をつなげて読んでみましょう。</p>	<p>◎前時までの文章とつなげて読む。</p> <p>◎ここまでの文章の概略をつかむ。</p> <p>△短い文章で話がまとまっている。</p> <p>△短いけど、わかりやすい。</p>	<p>・板書で、1から4段落までの一番大事な文をつなげて読めるようにする。</p> <p>・「問い」から「答え」に至る過</p>

		程を論の展開に即して読み取っている。【発言・ノート】
--	--	----------------------------

6 板書計画

<p>ありの行列 めあて つなかりに気を付けて、三・四段落の中で一番大事な文を探そう。</p>	<p>三段落 拡大</p>	<p>○ふしぎなことに、その行列は、はじめの ありが巢に帰るときに通った道すじから、外れていないのです。</p>	<p>四段落 拡大</p>	<p>○ありの行列は、石の所でみだれて、ちりぢりになってしまいました。一びきのありがつづきを見つけると、だんだんと行列ができて、みちすじは変わりません。</p>	<p>大事な文をつなげてみよう。 ○それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。 ○次のような実験をして、ありの様子をかんさつしました。 ○ふしぎなことに、その行列は、はじめのありが巢に帰るときに通った道すじから、外れていないのです。 ○ありの行列は、石の所でみだれて、ちりぢりになってしまいました。一びきのありがつづきを見つけると、だんだんと行列ができて、みちすじは変わりません。</p>
---	---------------	--	---------------	--	--

個人テーマ：子どもが学び続ける教材の工夫

第3学年2組 国語科（書写）デザインシート

令和元年11月12日（火）第4校時

場所 3年2組 教室

授業者 斎藤 輝子

1 単元名 小筆の使い方

2 授業者の思い

本単元は、「小筆の使い方や筆使い、字配りについて理解することができること」をねらいとしている。

本学級の児童は、3年生で習字を初めて習う児童が多い。そのため、習字の学習に意欲的であり、前向きに取り組み、上達したいと願っている児童が多い。しかし、まだ筆使いになれていなく、始筆・終筆や掠れに課題がある。特に、小筆になると、鉛筆持ちになってしまい、名前が小さくなってしまいう児童が多い。

そこで、本時では、中心線を書いた下敷きを利用することで、自分の名前の字数に合わせた字配りを知り、大きく書くことができるようにしたい。また、前時に書いたものと比べ、字配りを意識して書くことができるようにしたい。

3 本時の目標

字配りについて理解することができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

① バランスよく大きく書こう

2 名前の文字数による字配りを知る

3 自分の名前を字数に合わせた字配りで書く

4 前時に書いたものと比べて、気付いたことを話し合う

5 共有する

6 まとめ書きをする

第3学年3組 算数科デザインシート

平成31年4月23日(火)第4校時

場所 教室

授業者 野崎 智大

1 単元名

時こくと時間のもつめ方

2 授業者の思い

算数のみならず、様々なことに関心が高く、意欲的な児童が多い。一方で、授業に集中できずにいる児童もいるため、その児童のケアをしていく必要もある。今までの学習の経験から、児童たちは、班での交流には慣れているため、その交流を生かしつつ、より教科の本質に迫っていけるような課題の与え方が大切であると感じている。

本単元では、時刻という普段の生活に密接にかかわりあっている内容であるが、算数的な視点に立って考えることになると、難しくなる。それは、10進法の世界ではなく60進法の世界であるためであると考えられる。そのため、児童一人一人が時計を実際に動かして、量の感覚としてとらえることを通じて、本単元に取り組んでいきたい。

3 本時の目標(本時 1 / 3時間目)

ある時刻からある時間が経過した時刻を求めることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

① 時こくを求めよう。

2 プリント「坂戸1しゅうえきでん大会」の①に取り組む。

千代田小学校を8時30分に出発して、南小学校に20分後に付きます。

南小学校には何時何分に付きますか。

3 ②に取り組む。

南小学校を8時50分に出発して、若葉駅に20分後に付きます。

若葉駅には何時何分に付きますか。

4 ③～⑤の問題に取り組む。

(5 今日一日走った時間は何時間でしょう。)

6 ふりかえり

個人テーマ：一人一人のわからないを大切にしたい授業づくり

第3学年3組 理科デザインシート

令和元年6月5日(水)第5校時

場所 教室

授業者 野崎 智大

1 単元名

チョウを育てよう

2 授業者の思い

理科のみならず、様々なことに関心が高く、意欲的な児童が多い。一方で、授業に集中できずにいる児童もいるため、その児童のケアをしていく必要もある。今までの学習の経験から、児童たちは、班での交流には慣れているため、その交流を生かしつつ、より教科の本質に迫っていけるような課題の与え方が大切であると感じている。

本単元では、キャベツの葉に産んだ卵の観察からはじまり、幼虫、さなぎ、成虫へと変化していくチョウの観察を通して、昆虫の成長、体の特徴について学んでいく。さらにチョウ以外の虫の体の様子から読み取れることを一般化していき、昆虫一般へ視野を広げさせていきたい。

3 本時の目標(本時 6 / 7時間目)

チョウなどの成虫の体のつくりから同様な体の特徴を持つものを昆虫ということをとらえることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

問

チョウ以外の虫の体のつくりを調べよう。

2 他の虫(トンボ、アリ、バッタ)と似ている部分を探す。

チョウ(成虫)と同じで、足が6本ある。

頭・胸・腹に分かれている。

羽が4枚ある。

これらの特徴を持っている虫を**昆虫**と呼ぶ。

前時:チョウ(成虫)の体のつくりを調べる

いろいろな角度からのチョウの写真を見て特徴を捉える

観察の視点:体のかたち・足の数・羽の形・羽の数など

3 ジャンプ課題

ほかの虫たちは昆虫と呼ぶのだろうか。

カブトムシ、クワガタ、クモ、セミ、ハエなど

4 ふりかえり

第4学年1組 社会科デザインシート

日時 令和元年10月8日（火） 第4校時
授業者 島田 正恵

1 単元名 暮らしと水

2 授業者の思い

本単元では、わたしたちの生活に欠かせない水がわたしたちのもとに届けられる仕組みを調べまとめて話し合うことを通して、水道水を確保するための事業や施設・設備、対策が地域の人々の健康で良好な生活の維持・向上に役立っていることを理解することをねらいとしている。

本学級の児童は、学習に一生懸命取り組み、自分なりに活動をこなしている。調べたことを整理・表現する活動を行ってきたが、浅い理解であったり、深く考えなかったり、学んだことと生活との関係など多面的・多角的に思考を広げていくことに物足りなさを感じたりしている。

この学習を通して、「なぜ?」「どのようにして?」「どんな思いが?」など、課題解決を進めることから内容理解を高めたり、社会的見方・考え方を人々の思いや工夫などから深め広げていったりすることができるようにしていきたい。

3 本時の目標 (5/8時)

・浄水場の施設や仕組みを知り、きれいで安全な水を飲むことができていることを理解することができる。

学 習 の デ ザ イ ン

1 前時の学習を振り返る。

- ・学校の蛇口までの水の通り道
- ・どんな水?

2 本時の課題を確認する。

課 どのようにして、きれいな水をつくっているのか? 調べよう。

3 教科書や資料を通して調べ、整理する。

- ・きれいな水ができるまでの流れ等

4 全体で共有する。(分からないことやキーワード)

- ・浄水場の役目
- ・施設や機械、仕組み
- ・働いている人
- ・いつでもきれいで安全な水

5 調べたことや気づきを交流する。

6 本時の振り返りをする。

個人テーマ：具体物を意識させる授業。

第 4 学年 1 組 算数科デザインシート

令和2年2月 25日(火)4校時
場所 4年1組教室
授業者 坂本 岳人

1 単元名

分数のたし算ひき算

2 授業者の思い

本単元では、分数のたし算ひき算の中でも基礎となる、真分数や仮分数のたし算について学習する。

本クラスの児童は、計算を抽象的に考えすぎてしまい的外れな答えを出してしまう傾向にあるため、具体性を持った計算の仕方を身に着けられるよう授業に取り組んでいきたい。

そのためにも、図を使って分数の足し算引き算に取り組ませた上で更に数直線を使って、具体的なイメージを持って本時の課題に取り組ませていく。

また、グループでの活動では、自分の意見を説明することで、より深く授業内容を学ぶことを目的としているが、その反面、聞くだけで自分自身での思考時間を持たない児童が見受けられるため、その点には留意したい。

3 本時の目標(本時 6/9 時間目)

分数の性質を理解し、分数のたし算、ひき算をできるようになる。

学習のデザイン

1 前時の内容を復習する。

2 本時の課題を確認する。

問

新聞紙で、 $\frac{4}{5}\text{m}^2$ と $\frac{3}{5}\text{m}^2$ の台紙を作りました。
あわせると何 m^2 になりますか。

課

真分数や仮分数の足し算をできるようになる。

3 立式をする。

4 たてた式を全体で確認する。

5 図を使って計算の仕方を考える。(最初は個人で考え、時間をおいてグループで話し合いをする。)

6 数グループ発表する。

7 パワーポイントで確認する。

8 数直線で計算の仕方を考える。(体系は5に同じ)

9 発表する(状況に応じて数グループ)

10 パワーポイントで確認する。

11 課題からのまとめを行う。

12 発展問題を解く。

13 全体で確認をする。

14 基礎問題に取り組む。

15 本時の振り返りを行う。

第4学年2組 体育科学習指導案

令和元年11月11日(月) 第5校時 運動場
在籍児童数 男子19名 女子18名 計37名
坂戸市立千代田小学校 教諭 工藤 大輝

1 単元名 全員トライ！タグラグビー（ボール運動・タグラグビー）

2 運動の特性

(1) 一般的特性

- ・ラグビーを簡略化した陣取りゲームである。
- ・男女関係なく安全に楽しめる運動である。
- ・技能的にも比較的易しく、戦術的な指導が行いやすい運動である。
- ・広いコートを少人数で走り回るため、運動量が十分に確保できる運動である。

(2) 児童から見た特性

タグラグビーの楽しさや喜びを感じる要因	タグラグビーを遠ざける要因
<ul style="list-style-type: none">・相手をかかわして陣地に走りこめたとき・パスが通ったり、パスを受けたりしたとき・チームで協力して、考えながら活動できたとき・タグを取って相手の攻撃を止めたとき	<ul style="list-style-type: none">・ハンドリングがうまくできなかったとき・運動量が多いと感じたとき・体がぶつかり合い、恐怖感をもったとき

3 児童の実態

(1) 技能

第3学年のタグラグビーでは、タグを取ったり、相手をかかわしたり、パスやキャッチなどの基本的な動きを経験している。ゲームの中で積極的に動いているが、ボール操作に技能差があり、楕円のボールの扱い方に苦手意識を感じている児童も多い。また、スペースを見つけたり、そのスペースに走りこんだりすることができる児童は数名しかいない。

(2) 態度

体育の授業に進んで取り組んでいるが、「体育の授業が好き」と感じている児童は全体の80%である。ボール運動に関しては、65%と減少傾向にあり、その理由は恐怖心などであった。他にも、上手な人が全てやってしまったたり、点数が入らなかつたりすることが、苦手の理由としてあがった。ゲームでは勝敗の結果によって不満を口にする児童もいる。

(3) 思考・判断

1学期のプレルボールでは、「どうやったら得点が取れるか」をチームで話し合いながら取り組んだが、攻撃よりも守備に関する作戦が多くあがり、単調な攻撃が多くなってしまった。また、「話し合った作戦がうまくいかず楽しくない」と感じている児童も多くいた。技能に自信がないという理由で、作戦会議の中でも発言せずに終わってしまう児童も見られた。

4 教師の指導観

(1) 技能

技能の定着と向上のために、準備運動やパワーアップタイムでボールにたくさん触れさせ、慣れさせる。パワーアップタイムでは、相手をかまし前に進むために1対1のタグ取りに取り組ませる。また、パスの出し方や受け方、走りながらパスを受けるなどの動きを身に付けるために、三角パスやジグザグリレーに取り組ませる。メインゲームでは、攻守交代制で3対2の攻撃優位のゲームを行うことで、身に付けた技能をゲーム内で生かしやすいし、トライする喜びを全員に味わわせたい。

(2) 態度

本単元では、段階的に技能面を向上させられるような学習過程を立てることで、児童のタグラグビーに対する意欲を高めさせる。また、ファーストトライを10点にすることで、全員がトライを目指し、得点する喜びを味わえるようにする。ラグビーの特色（One for all All for one, ノーサイド）を味わわせるためにラグビーの魅力に触れながら指導を行っていき、ゲームに対する態度を養っていく。

一人一つマイボールを作成し、日常的に楕円のボールに触れさせることで、ラグビーに対する愛着をもち、関心を高めさせたい。

(3) 思考・判断

得点するためにはどの作戦がいいのかを、チームの良さや児童から出た作戦カードをもとに話し合い、選ぶようにする。また、作戦ボードを使いながら自分の役割を明確にすることで、作戦を理解し実行できるようにする。その際、作戦が上手に決まっているかどうかを兄弟チームで見合い、次のゲームに生かせるようにしたい。

5 研究主題 「資質・能力をバランスよく育み、運動の特性や魅力を味わわせる授業の工夫」

仮説(1) 児童の思考に寄り添った学習過程を設定することで、資質・能力をバランスよく育むことができるだろう。

手立て 学習過程の工夫

(1) 児童の思考に寄り添った学習過程

予想される児童の思考をもとに、気付かせたい動きを明確にし、段階をおって指導していくことで技能の向上や関心・意欲の向上につなげていく。単元の前半では技能の習得を図り、単元の後半では身に付けた技能を活用し、チームにあった作戦を選んでいく。

(2) 「やって わかって できる」のサイクル

1時間の中で課題を確認し、ゲーム1(やって)、みんなで学びタイム(わかる)、ゲーム2(できる)のサイクルで行う。みんなで学びタイムで、その時間の課題を焦点化し、児童の良い動きを広めていき、技能の向上につなげていく。

(3) パワーアップタイムの設定

準備運動でボールにたくさん触れさせ、楕円のボールに慣れさせる。パワーアップタイムでは、単元の最初からトライするために必要な技能を向上させるために兄弟チームで取り組むことでアドバイスをし合いながら関心、意欲の向上も図る。

① 三角パス

ボールを持って前に走る、ボールをもっていない人がボールを持っている人へついていく感覚や距離感、ボールを横や後ろにパスする感覚を養う。

② タグ取り合戦 1, 2

相手が前にいても前に進む, 相手をかかわす, タグを取る技能の向上。トライする感覚を養う。

仮説(2) 教材や仲間と関わり合うことで, 運動の特性や魅力を味わうことができるだろう。

手立て 教材や仲間との関わり

(1) マイボールの活用

ペットボトルと新聞紙, ガムテープで作った自作のラグビーボールを持つことで, 自分だけのボールに愛着をもち, 楕円のボールに慣れさせ, 休み時間や家庭で練習ができるようにした。また, 名前やチームの人のメッセージを書くことによって関心・意欲の向上を図る。

(2) いつでもラグビー

タグやボールをいつでも使えるよう, 体育小屋の前に置く場所を設置し, 休み時間にいつでも使えるようにする。

(3) 兄弟チーム

パワーアップタイムや兄弟作戦練習タイムで選んだ作戦ができていのかを見合ったり, トライを増やすためにはどうすれば良いかアドバイスし合ったりする時間を作る。また, 兄弟チームで協力し合うことで意欲の向上を図っていく。

6 単元の目標

(1) 進んで運動に取り組み, 規則を守ったり, 勝敗を受け入れたり, 場や用具の安全に気をつけたりできるようにする。 【関心・意欲・態度】

(2) ゲームに応じた攻め方を工夫し, 勝つために簡単な作戦を選ぶことができるようにする。 【思考・判断】

(3) 基本的なボール操作や, ボールを持たないときの簡単な動きができるようにする。 【技能】

7 単元および学習活動に即した評価規準

	運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
単元の評価規準	タグラグビーの楽しさに触れながら進んで運動に取り組むとともに, 規則を守って友達と仲良く運動しようとしたり, 勝敗を受け入れようとしたり, 場や用具の安全に気をつけようとしたりしている。	ゲームに応じた攻め方を工夫し, 勝つために簡単な作戦を選んでいる。	基本的なボール操作や, ボールを持たないときの簡単な動きを身に付けている。
学習活動に即した評価規準	①タグラグビーの楽しさに触れ, 進んで運動に取り組もうとしている。 ②規則を守り, 練習やゲームをしたり, 勝敗を受け入れようとしたりしている。 ③協力して用具の準備や片付けなど進んで行おうとしている。 ④ゲームを行う場や用具の安全に気をつけながら運動しようとしている。	①ゲームに応じた攻め方を工夫している。 ②パスを受けやすい場所を考えている。 ③ゲームに勝つために, 簡単な作戦を選んでいる。	①ボールを持ったらゴールに向かって走ることができる。 ②タグを取られてからすぐに味方にパスを出すことができる。 ③パスを受ける場所に動くことができる。

8 単元計画

(1) 領域（ゲーム・ボール運動）の取り上げ方

学年	運動
第3学年	ゴール型ゲーム（タグラグビー8時間、ラインサッカー10時間）ベースボール型ゲーム（ティーボール8時間）
第4学年	ゴール型ゲーム（タグラグビー8時間、ラインサッカー10時間）ネット型ゲーム（ポートボール8時間）
第5学年	ゴール型（サッカー8時間）ベースボール型（ティーボール6時間）
第6学年	ゴール型（サッカー8時間、バスケットボール6時間）ネット型（ソフトバレーボール7時間）

(2) 運動種目（陣取り型ゲーム）の取り上げ方

学年	教材	目指す動き
第3学年	タグラグビー	○ボールを持って前に走る動きや、相手をかかわす動きを身につけること
第4学年	タグラグビー	○ボールを持って前に走る動きや、相手をかかわす動きを身につけること ○スペースを見つけ、パスを受ける場所に移動すること

(3) 指導と評価の計画（8時間扱い） 本時は○印 4/8時

時	2	3	4	5	6	7
ねらい	勝つために良い動きを見つけてよう	ボールを押したら前に走ろう。	パスを受けやすい場所を考えよう。	パスをつないで、トライを決めよう。	勝つためにチームに応じた作戦を準備しよう。	勝つためにチームに応じた作戦を実行しよう。
指導内容	・パワーアップタイムのやり方 ・ボールを持ってからの動き ・タグを取られてからの動き	・「前へ」の言葉 ・味方の声「前！」	・パスを受ける場所	・パスを受ける場所 ・味方が取りやすいパス	・チームに合った作戦 ・練習方法	・チームに合った作戦 ・練習方法
ねらい	勝つためにどんな動きが必要なんだろう。	「前を走れよう。」 「タグを取られても前に進もう。」	「どこにいればボールをもらえるか。」 「ボールを持っている人についていけばいい。」	「パスがうまくいけばトライできる。」 「パスがもっと取りやすければトライできる。」	「作戦があれば勝てる。」 「自分のチームの良さって何だろう。」 「この作戦ならできそうかな。」	「前回の作戦をもっと改良してたくさんトライしたい。」
ポイント	「相手がいると中々進めないな。」 「走り方がゆっくりから速くなったらかわせた。」 「パスがしたいけど味方が前にいてパスできない。」	「前には相手がいると進めないな。」 「前を走ったけどすぐタグを取られて前に進めないな。」	「ボールを持っている人より前にいては何もできない。」 「ボールを持っている人の近くにいる方がパスが取りやすい。」	「パスが取りづらいな。」 「パスを受ける場所を工夫すればもっとトライができる。」	兄弟作戦練習タイム 「走るのが得意だからクロス作戦を使おう。」 「おとり作戦を使えばみんながトライできるかもしれない。」	兄弟作戦練習タイム 「エスカレーター作戦なら取られたらすぐ横にいてくれるからパスしやすい。」 「あの動きを真似しよう。」
学習過程 児童の思考	○良い動きの観察 「前へ走ること。」 「パスをもらいやすい位置に動くこと。」 「パスがつかぬこと。」	○フリーランス場面 ボールを持って後ろに下がってしまった場面 「下がってしまうと進めないでタグを取られていく。」 「前に出る方がトライに近づける。」	○フリーランス場面 パスをするときに近くに味方がいる場面 「味方が近くにいればすぐパスがもらえる。」 「パスを受けたら相手がいなくて走ろう。」	○フリーランス場面 パスが決め手となってトライした場面 「パスがうまく通るとトライのチャンス。」 「前に向かって投げると取りやすい。」 「パスを受ける場所を話し合っておこう。」	○作戦ボード 一人一人の役割を確認する。 「おとり作戦で、Aさんがおとり、Bさんがついていく。そしてCさんが相手のいない方向へ走ってトライ。」	○作戦ボード アドバンスをし合って良いところ、改善点を考える。 「パスがしつかり通っていいよかったよ。」 「もっと右によるといいよ。」
ポイント	「トライできた。」 「すぐにタグを取られてしまってたらいできなかった。」	「前へ進めてトライができた。」 「ななめに走っていけば進める。」 「タグを取られても前に進んだ方がいいんだ。」	「パスしやすくなった。」 「タグを取られてからすぐパスができた。」 「トライできなかった手もトライできるようになった。」	「少し長い距離でもパスが通った。」 「ここなら1回のパスでトライできるぞ。」 「走りながらボールをキャッチしたら勢いが止まらないでトライできる。」	「作戦がうまく決まった。」 「あまり作戦がうまく決まらなかった。」 「練習すればみんながトライできるぞ。」	「作戦が実行できてトライが多くなった。」 「チームの全員がトライできた。」
ふりかえり	「前に進めたらパスもパスもしやすかった。」 「ボールを持っている人の近くにいるとパスがうまくできる。」 「パスがうまくいくとトライできる。」	「ボールを押しついたら前に走らなくちゃいけない。」 「チームで声を掛け合おう。」 「相手がいらない方向へ走ろう。」 「パスがうまくいけばもっとトライできる。」	「ボールを持っている人の近くでパスを受ける練習をしておこう。」 「パスを受ける前から相手を見ておこう。」 「相手がいらない方向へ走っておけばすぐにトライできる。」 「パスをもらって前線に押し込んでトライしたい。」	「パスがうまくいけばトライできる。」 「パスがもっと取りやすければトライできる。」	「チームで作戦を決めると1人1人にならずにまとまって攻撃できる。」 「チーム一丸になれば勝てる。」 「作戦をもっと改良して、実践したい。」	「作戦が決まると気持ちがいい。」 「作戦を準備してはよかったよ。」

前時の振り返り
本時のねらいの明確化

「やってみる」
ねらいをもとに試合
ねらいに沿った良い動きを見つけよう。

「わかる」
フリーランス場面を再現してどんな動きが良かったか考える。
②「この場面ならどう動く？」

「できる」
ゲームの中で練習態度ができるように意識してゲームを行う。

本時の振り返り
次時の課題を明確にする。

9 本時の学習と指導 (4/8時)

(1) ねらい ○パスを受けやすい場所を考えている。

【思考・判断】

(2) 準備

・ボール ・タグ ・ベルト ・得点版 ・カラーコーン ・学習カード ・CD ・アンプ

(3) 展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点 (○指導 ◆評価規準)
導入 10分	1 集合・整列, 服装確認, 挨拶をする。 2 マイボール体操をする。 3 パワーアップタイムをする。 (1) 三角パス (2) タグ取り合戦2	○身なりを整え, 気持ちよく始めるようにする。 ○音楽に合わせて必要な部分を動かすようにする。 ○ゲームに必要な動きを習得できるようにする。 ○ボールを持って走ったり, 走りながらキャッチをしたりする動きが身に付くようにする。
展開 28分	4 本時のねらいを確認する。	○前時の振り返りを確認し, 本時のねらいを明確にする。
	パスを受けやすい場所を考えよう。	
	5 メインゲーム1を行う。 ・ねらいを意識しながら試合をする。 ・タグを取られた時に, どこに味方がいれば良いかを意識する。	○ねらいを意識させてゲームをさせる。 ○見ている子に自分のチームのパスの受ける場所, 受け方に着目させる。 ○ボールを受けやすい場所に移動している子を称賛してよい動きが分かるようにする。
	6 みんなで学びタイムを行う。 ・メインゲーム1で見ることができた場面を再現して, パスを受ける場所を共有する。	○パスを受ける場所 ・ボールを持っている子よりも後ろ(声掛け「後ろ」) ・相手がいないところ(声掛け「スペース」) ○共有したい場面を再現し, 本時のねらいを再確認させ, メインゲーム2につなげる。
7 メインゲーム2を行う。	○トライにつながるパスが成功したところを称賛する。	
ゲームのルール(メインゲーム1, 2同様) ・攻め3人, 守り2人。 ・ゴールラインを越えたらトライ。 ・得点はその試合のファーストトライ10点, その後同じ人がトライしたら1点。 ・タグを取られるまでパスはなし。 ・取ったタグを返すまで, 取られたタグを返されるまで次のプレイに参加できない。 ・タグを取られるのは3回まで。 ・タッチラインを踏んだり, 越えたりしたらその時点で最初の位置に戻る。 ・パスはカットできない。 ・ボールは前に投げられない。 ・ボールを落としたりしたら拾ってそのまま始める。	○パスがうまくいっていないチームには作戦ボードを使いながら役割を確認し, パスの成功例を伝える。 ◆パスを受けやすい場所を考えている。【思考・判断】 △努力を要すると判断される児童(C)への指導の手立 ・どこにいけばパスがもらえるのかを一緒に動きながら確認する。 ◎十分満足できると判断される状況(A)の児童の具体的な ・よりトライにつながる場所を理解し, チームメイトに伝えている。	
8 チームで学びタイム	○チームメイトの動きについて振り返らせる。	
整理 7分	9 本時の学習の振り返りをする。 ・振り返りの発表 ・学習のまとめ ・次時の予告	○パスを受ける場所についてできたこと, 難しかったことを学習カードに記入させる。 ○体全体をほぐし, 気持ちよく挨拶をさせる。
	10 整理運動, 挨拶, 片付けをする。	

第4学年2組 音楽科デザインシート

令和元年5月28日(火)第4校時

場所 音楽室

授業者 田中 澄美

1 単元名 明るい歌声をひびかせよう

2 授業者の思い

本単元では、音程やリズムに気を付けて階名で視唱したり視奏したりしてハ長調の読譜に慣れたり、呼吸や発音の仕方に気を付けて自然で無理のない歌い方で歌ったりすること、歌声の掛け合いや重なりに気を付けて聴き、想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気づくことをねらいとしている。3年生から指導が始まったハ長調の楽譜の視唱や視奏により慣れ親しみながら、歌声のもつよさを味わう学習を展開する。

本学級は、音楽活動に意欲的に取り組む児童が多い。どの楽曲でも明るくのびやかに歌い、グループ活動を通して歌唱力を高めてきている。

本時では、前時に取り組んだ和音の構成音から音を選んでつくった旋律をつかい、友達のつくった旋律と重ねたり、歌とリコーダーの旋律を重ね合わせたりして演奏する。互いの音を聴き合ったり、重なり合う響きのよさや美しさを感じ取ったりしながら、聴き合い、響かせ合う児童を育成していきたい。

3 本時の目標(本時7/7 時間目)

重なり合う響きのよさを感じ取りながら、音を合わせて演奏することができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

④

重なり合う響きを感じ取りながら、音を合わせて演奏しよう。

2 本時までに学習したことを確認する。

3 表現の工夫を考える

4 グループで表現する。

5 全体で共有する。

6 本時の振り返りをする。

個人テーマ：児童のつまずきから展開させる授業

第5学年1組 国語科（書写）デザインシート

令和元年6月18日（火）第4校時

場所 5年1組 教室

授業者 細野 愛

1 単元名 文字の組み立て方「道」

2 授業者の思い

本単元では、「中と外の組み立て方と、穂先の動きに気をつけて書くこと」をねらいとしている。

本学級の児童は、書道教室に通っている児童が数名いる。日常でも文字の組み立て方を意識して板書をノートに書き写したり、漢字練習をしたりすることができる児童もいる。しかし、「しんにょう」の筆づかいや、中の部分と、外の部分（しんにょう）との組み立て方となると字形を整えて書くことが苦手な児童が多い。

そこで本時では、「しんにょう」と中の部分（首）の組み立て方について習熟を図る。「しんにょう」の「はらい」は、中の部分の右端ではらい始めると字形が整えやすいことに気づかせ、毛筆だけでなく硬筆でも使えることを意識させていきたい。また、普段書いている文字とお手本を見比べ、他の文字でも使えることを確かめ、一般化していきたい。

3 本時の目標

「しんにょう」と中の部分の組み立て方を理解することができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

①

「しんにょう」と中の部分の組み立て方を理解して書こう。

2 「道」を硬筆と毛筆で書く。

3 試書と教材文字を比較して、気付いたことを話し合う。

4 「しんにょう」と中の部分の組み立て方、書き方を確認する。

5 「しんにょう」の形に気をつけて練習する。

6 毛筆で本時のまとめ書きをする。

第5学年2組 家庭科デザインシート

令和元年10月4日（金）第1校時

場所 家庭科室

授業者 中元 希琳

1 題材名 わくわくミシン

2 授業者の思い

小学校家庭科のねらいは、「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、家庭生活を大切にすることはぐくみ日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことである。

本学級の児童は、これまでにコの字型・グループ型の学習をしてきており、分からないときには児童同士で質問し、互いに学び合う姿が見られる。家庭科以外でも学び合う時間を多く取り入れており、友達に自分の考えを説明するときには、相手が分かるまで根気強く説明し続ける姿も見られる。しかし、集中力に欠けなかなか課題に取りかかれない児童もおり、個別指導が必要な児童もいる。

本授業では、今まで学習したことを振り返りながら、ミシンの操作や直線縫いや返し縫いに取り組みせていく。また、安全な製作に必要な用具の安全な取り扱いができるようにしていく。また、分からなくなったら周りに聞き、課題解決できるような学習も引き続き行っていく。

3 本時の目標（1／6時間）

ミシンの基本的な操作やミシンを用いた直線縫いの仕方について理解し、直線縫いや返し縫いができる。

学習のデザイン

1 課題を把握し、学習内容をつかむ。

(1) 本時の課題を確認する。

胸・脇・紐通し部分のミシン縫いをしよう。

2 課題解決の見通しをもつ。

・製作手順・返し縫いの説明をする。

3 エプロン製作をする。

→困ったり分からなかったりしたら周りに聞いてもよい。

4 ふりかえりをする。→次の手順に生かせるように

令和元年10月15日(火)第2校時

場所 5年2組教室

授業者 畑仲 泰之

1 単元名 『We Can!1』 Unit6 「I want to go to Italy.」

2 授業者の思い

外国語科の授業において、本学級の児童は、教師や児童の話をよく聞き、英語で発話することにも前向きに取り組もうとする姿がよく見られる。友だち同士で、英語の意味を確認したり、英語での言い方が正しいか確認したりして、ペアの児童をうまく活用し、学習に取り組んでいる。

意欲的ではあるが、一方で、間違った発言をするのが心配であると感じている児童もいて、英語での発話がスムーズにできているとは言えない面もある。

本単元では、今までの自分の身の回りのことから、広く世界に目を向けさせることがねらいである。そして、「どの国であるか」を考えながら聞いたり、「おすすめの国」を他者に伝えたりする活動を通して、世界に興味をもちながら英語を聞いたり話したりさせたい。また、たくさんの音声での input を通して、自然な output への流れを作り、児童に自信を持たせて自然な発話をさせたい。

3 本時の目標(本時1/4時間目)

行きたいところを伝える表現がわかる。(聞くこと)

学習のデザイン

1 あいさつ

2 歌 **The Bear Went Over the Mountain**

何度も聞かせたり、状況を説明したりして音を input させる。歌えるところは歌わせる。

3 WORD BOOK「ページ探しゲーム」

ページ探しゲームを行う。AT THE ZOO のページが2回目の答えになるように行う。

4 **Sit Down Game** 「最初に行く場所」

動物園で最初に行く場所について Who wants to go~ first?と尋ね、該当したら挙手をして座らせる。

5 本時の課題を確認する。

④

行きたい国を見つける。(できればその理由も)

6 We Can!1 Unit6 P42,43 Watch and Think1

映像教材を使い、ペアで確認しながら聞かせる。

7 振り返りカード記入

8 あいさつ

第5学年3組 道徳科デザインシート

令和2年2月12日(水) 第5校時

場所 5年3組教室

授業者 長島 理史

- 1 主題名 温かい心で 内容項目 親切・思いやり(B 主として人との関わりに関すること)
教材名 こいのぼりに思いをこめて 出典「彩の国の道徳 心の絆」(埼玉県教育委員会)

2 授業者の思い

2011年3月の東日本大震災時、本クラスの児童は2歳であった。大震災に関する児童のアンケート結果を見てみると、覚えている児童が30人中9人であり、どんな地震であったか記憶にない児童が多かった。覚えている児童も、おぼろげながらの記憶であった。また、東日本大震災のことを知っている児童は30人中29人であったが、「名前だけ知っている」や「大きな地震」という大まかな内容の答えが多かった。こう見ると、小学校に通う児童の多くが東日本大震災の悲惨さやおそろしさ、復興へ向けての人々の尽力などを詳しくは知らないということが分かった。そういう時代だからこそ、震災当時の人々の記憶や記録を基に、児童に震災について様々なことを考える時間を提供したいと考えた。そこで、本時は埼玉県教育委員会作成の資料集から本教材を選んだ。震災により多くの尊い生命を失ったことから、かけがえのない生命を尊重する心を育むとともに、厳しい状況の中でも人のために尽くす姿や助け合う姿を通して、他者を思いやる心を育みたい。

3 本時の目標

思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。

学習のデザイン

- 1 東日本大震災のアンケート結果をもとに、地震について知っていることを発表する。
- 2 「こいのぼりに思いをこめて」を読み、大輔の気持ちを中心にして話し合う。
 - ①震災の画面を見ながら、大輔は何を考えたか。
 - ②大輔はどんなことを思いながらこいのぼりに応援メッセージを書いたのか。
- 3 【ジャンプ】資料を参考にして、自分が何をすべきかを考える。

◎なぜわたしたちは、被災者のことを考えなければならないのですか。
わたしたちは、こういうことがあったときに何を考え、何をすることができるのですか。
資料を参考にして被災者に伝わるような言葉でまとめなさい。
- 4 教師の説話を聞く。

第6学年1組 算数科デザインシート

令和元5月21日（火）第5校時

授業者 吉田 亘

- 1 単元名 円の面積
- 2 授業者の思い

本単元では、曲線で囲まれた円の面積の求め方を考えることと円を含む複合図形の面積の求め方を考え、円の面積の公式を活用できるようになることをねらいとしている。それには図形を既習の形に等積変形させる必要がある。そこで児童は1つの図形を色々な視点から見て、どの形に変えられるのか、頭の中で自在に組み合わせていく力を身につけることが大切である。

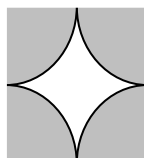
本時では1/4円を組み合わせた複合図形の面積を出すことで「円」の求積方法を想起させ、複合図形（ドーナツ型）のジャンプ問題に取り組むことにより、より複雑な複合図形においても、図形の等積変形が有効であることを感得させる。また、本課題を解決するためには1/4円がどこを中心とした半径何cm円であるか分かる必要があり、解決を図る作業（作図や切り貼り等）を通し図形の分解への理解や習熟を深めていく。また、グループで取り組むことにより、対話を通し自分の考えを修正したり、自信を持ったりさせながら難しい問題にも諦めずに挑戦していこうとする気持ちを育てていきたい。

- 3 本時の目標（本時5/6時間目）

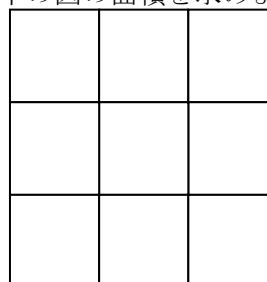
複合図形の求め方について、図や式を使って考え表現することができる。

学習のデザイン
<ol style="list-style-type: none"> 1 前時までを想起する。 2 本時の課題を確認する。 <li style="border: 1px solid black; padding: 2px;">不思議な形の面積を求めよう 3 基礎問題を解く。(個人→グループ) 4 全体で共有する。 5 ジャンプ問題を解く。 6 本時のふり返しをする。

- 3 基礎問題



- 4 ジャンプ問題 下の図の面積を求めましょう。



テーマ：互いに評価し合い、高め合うことの価値に気づき、目標のもてる授業

第6学年2組 国語科デザインシート

令和元年12月3日（火）第4校時

場所 教室

授業者 曾志崎 弥生

1 単元名 『鳥獣戯画』を読む

2 授業者の思い

本単元では、筆者のものの見方を捉え、自分の考えをまとめることをねらいとしている。本教材は絵と文を照らし合わせながら読むことで、筆者の着眼点やそれに対する評価、表現の仕方について気づかせていくことができる。記述の特徴として、筆者の絵の正確な観察をもとに、絵の感想・意見とを繰り返し述べていること。分かりやすく伝えるための書き出しや文末表現の工夫、体言止めや比喻表現など、読者を引き込む書き出しの効果についても学ぶことのできる教材である。論の述べ方は、児童が鑑賞文を書いていくときに活用できるものとなっている。

本学級の児童との国語の授業は、本時で10時間目である。第1時の最初に国語についての質問を行ったところ、「国語が好き・どちらかといえば好き」が2名、「国語が好きでない・あまり好きでない」が31名であった。授業中の挙手も限られた児童であり、指名による発言も消極的なものとなっている。

本学習を通して国語の論理性に気づき、国語の面白さを共有できるクラスにしていきたい。

3 本時の目標（10／12時）

筆者のものの見方や感じ方を捉え、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

学習のデザイン

1 本時の課題を確認する。

④ 「鳥獣戯画」の絵について、筆者の表現方法を参考に自分の考えをまとめよう。

2 筆者のものの見方や感じ方を想起する。

3 自分の考えをまとめた文章をグループで回し、共有する。

交流の仕方

- ・自分のワークシートをグループで回し、それぞれ読み合う。
- ・友達の記述について、筆者の使っている工夫が入った文章になっているかをみる。
- ・なるほどと思ったところ、もっとよくなると思ったところについて、アドバイスを書き入れる。

4 数名の児童の作品を全体で紹介し共有する。

5 交流したことを参考に自分の考えをまとめる。

6 本時を振り返り、次時の見通しをもたせる。

第6学年3組 理科デザインシート

令和2年1月28日（火）第6校時

場所 6-3教室

授業者 関原 嘉紀

1 単元名 電気と私たちの暮らし

2 授業者の思い

本単元では、身の回りで見られる電気の利用について興味をもち次の4つのことを理解させたい。1つ目は、電気は発電できること。2つ目は、発電した電気が蓄電できること。3つ目は、電気は、光・音・運動・熱などに変換でき使用できること。4つ目は、電熱線の太さによって発熱の仕方が変わること。さらに、電気の性質やはたらきについて推論する能力を育てるとともに、それらについての理解を図ることができるようにしたい。

児童は、手回し発電機を使った実験や電熱線の発熱の様子の実験などを通して、とても意欲的に取り組み電気の性質やはたらきについて理解を深めることができている。1人1人が、日常的に使用している電気について、身近に感じることができると興味・関心がとても高い。

本時では、学習した発電した内容に自分なりの工夫をしながら、電気の性質を利用した自分の生活を豊かにできるものを作成（考え）させたい。その際の視点として、効率的に電気を利用できることやエコにつながることを意識させたい。

3 本時の目標（本時13／14時間目）

電気の性質を利用して、自分の生活を豊かにするものを作ることができる。

学習のデザイン

1. 本時の課題を確認する。

問

これまでの学習したことをもとに、電気を利用して自分の生活を豊かにできるものを作ろう

2. 今までの学習を振り返る。（資料配布）

3. ものづくりの計画を立てる。（視点…電気を効率的に利用する、エコにつながる）

4. グループで共有する。

5. 全体で共有する。

学び合い研修会① 指導講評 谷井先生

○研究について

- ・グループだけではなく全体を見ることも必要
- ・一人残らず子どもの学ぶ権利を保障する授業を目指す。
→他者の力を借りて自分の学びを深める。ペア⇒グループへ

○教室の雰囲気

- ・学びは聞くことで生まれる。発信型は学びがない。
- ・教室の声のトーンを落とす。
- ・低学年はコンパクトにする。
→ペアやコの字にして、好き嫌いを乗り越える。コの字はペア主体

○学ぶことについて

- ・考えることが大事「どう考えているの？」
- ・教材から聞く力
- ・安心感、平等感
→一生懸命考えたことに価値がある。
- ・山登り型
→登り方を学ぶ。

○野崎教諭の授業から

- ・たくさんの虫から昆虫の定義へ
- ・資料は時間との関係で
- ・理科 虫→面白さ、人間と違う
嫌いでも面白い
- ・世界の不思議なものと出会う。
- ・教材の価値に触れる。

第2回 学び合い研修会

【指導講評】

・「どうやったら困難な子ども学び続けられるのか」をベースに研究していくことが大切

一人残らず学び続ける時間を1分でも増やすことを目標とする

45分の授業の中で、1人平均10分、学んでいる姿が見られる

その時間を10分から20分、20分から30分と増やしていくことができれば子どもたちの伸び率が倍になっていく

・授業研究の力 = 「全員をみる力をつけるトレーニング」

教員が授業するときには、「こうしたら、児童はこうだろう」という予想の連続であり、それを更新していくことが必要である。

その際、「授業者の言葉を、子どもたちが受け止められたかどうか」という視点を持つことが大切。

「何人が話を聞いていて、何人が理解しているのか」という目を養っていく。

・授業研究では

全体をみるでもない→全員を見る

授業を受ける立場でもない→子どもを見る

評価するものでもない→学び

・学び合いのActiveとは

人のペースではなく、自分のペースで学習に向かうこと

最近では、45分授業中の38分が自己追求、7分が人のペースであることが多い。(平均)

困難な子たちほど、人のペースでは絶対に学べない

人のペース

全体で先生が話している時間や仲間が話している時間

グループで仲間が話している時間や仲間に習っている時間（特に教える側の語尾が強くなっているとき）

※教える側も「あれ、分からなくなってきた」という時は自分のペースであることがある

自分のペース

仲間より資料（作品やプロの映像も含む）や辞書が最大の学び

関わるか関わらないか主体的に決める（資料との格闘がメインになるので、助けになる友だちありがたい）

・低学年の場合、自分のペースで学ぶために、他者が必要になる

（国語の例）Aさんの発言→ペアでリボイス→音読→Bさんの発言

自分のペースで学ぶことがなかなか続けられないから、他者との関りが濃くなる

前のペアは、機能しない。文字が反転していると学べないので、横のペア

学び合い研修会③ 指導講評 永島先生

全体について

- ・千代田小学校の一年間の変化
主体性・自律性の研究（個でも集団でもできない）
教えるでもなく、共通理解でもない。個人が頑張る。
資料で授業を作ることが多くなった。
- ・授業研究では、人数×時間の視点で見ると。全員を見るでもなく、ひとりを見るでもなく、ひとりひとりを見る。
- ・資料は、辞書・図鑑・地図等（算数では類題（小問はパスを狭めることになるからよくない））。
- ・困難な子ほど資料が好き。
- ・パス（課題達成へのプロセス）をたくさん用意する。
→資料の質・量 量はたくさんある方が多様性を保障できる。
使うか使わないかを選ぶのは子ども。
- ・ユニバーサルデザインフォーラーニング（UDL）につながる。
- ・直接的でなく間接的に学び合うこと。
→資料と関係が成立したら、他者との対話が生まれる。他者しかパスがない時は、苦しい。
- ・課題は、教師が求めているレベルのことを課題を考えていくプロセスで通過できるような課題を作るとよい。

道徳について

- ・道徳の授業と国語の授業の違いは、国語は文→文、道徳は文→自らのこと。
- ・教科書の読み替えは可能。指導要領を満たしていれば問題ない。
- ・旧来の道徳の授業は、心情を理解するものであった。これからの道徳は、授業を受ける前は知らなかったことを知ったか。
- ・類似実践として
 - ①想定していなかったこと 事実を書く
 - ②その時望むことは何？精神面を重視して書く。
→想定外のことを知る。人それぞれ違う。

3行レポート

名前 神田 美香子

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	3-3	理科	野崎	教師がたくさん資料を用意し、児童が昆虫の体の特徴について資料をみながら意欲的に学んでいた。ジャンプ問題では、観察の視点を意識して、昆虫を選ぶことができた。間違っている子に、次時で答えを明確に伝えたい。
9月24日	2-2	音楽	佐藤	1つ1つ丁寧に指導していた。音楽活動に児童が意欲的に楽しそうに取り組んでいた、ペア学習では、友達の演奏をよく聞きアドバイスも的確に伝えていた。鍵盤ハーモニカの運指の仕方を正しく理解することができた。
10月2日	2-3	国語	八木原	児童が十分考える時間をとることの大切さを学んだ。教師の発問に対し、一生懸命答えようとしている児童がいた。叙述に即して登場人物の気持ちを読み取り、その根拠を常に教科書の文から探すことの大切さを学んだ。
10月29日	1-2	国語	湯浅	低学年があきないテンポのよい授業であった。意欲的に言葉遊びをしながら、自分なりの文を作ることができた。プリントを交換することで他の考え方を知り、学びを深めることができた。
11月19日	2-1	算数	高橋	おもしろいジャンプ問題で、児童が最後まで意欲的に取り組めた。各自で工夫しながらいろいろなやり方で解いていた。問題の <u>ぜんぶ</u> という言葉に惑わされている児童もいたようだ。
12月12日	なかよし	生活	益田 坂田	教師の聞き返しが適切で、児童が落ち着いて学習していた。高学年の児童がグループの意見をしっかりまとめメモをとることができていた。切符の販売機を実際に作り、意欲的に切符の購入の仕方の練習をしていた。
1月21日	1-1	国語	神田	学び合いには、クラスの何でも言い合える人間関係が基盤としてあることを学んだ。手悪さをしている児童が2名いた。すべての児童が意欲的に学べる授業を工夫することが大切だと思った。
12月12日	5-3	道徳	長島	写真や子どもの作品等の資料をたくさん用意することで、震災の恐ろしさが具体的にわかり、自分の考えが書けた。ジャンプ課題で従来の道徳を越える授業だった。自分は、個人ばかりを見ていたので全員の学びを見る必要があると思った。

名前 湯浅 利美子

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	4-2	理科	野崎	資料の質と量の大切さを感じた。児童が、様々な資料を活用して昆虫の体のつくりについて学び続けることができていた。また、児童の発表後、教師の「前足」についての発問によって、より理解を深めており、発問のタイミングの重要性を学んだ。
9月24日	2-2	音楽	佐藤	児童Tが、運指が苦手な児童に「困ってない？」と問いかけ、それに対し頷いた時にはそっと見守っていた。ペアとの人間関係の重要性と近くに座る安心感、低学年なりの接し方を学んだ。

10月2日	2-3	国語	八木原	発表している時、発表者や聞いている子は思考が止まり学ぶことは少ないと知った。授業では共有すべきこと、児童の取組の見届けの方法も工夫した方がよいことを学んだ。
10月29日	1-2	国語	湯浅	活動に行き詰った児童がいた時、プリントをペアやグループで回覧した結果、取り組むことができたと言っていた。見合うことも勉強になることと、見合うタイミングの重要性を学んだ。
11月19日	2-1	算数	高橋順	課題に行き詰った時の軌道修正のタイミングが大事だと学んだ。児童はジャンプ問題に意欲的であった。行き詰っても学び続けられる児童とそうでない児童を見分ける力を身に付けていきたい。
1月21日	1-1	国語	神田	自分が困ると友達を見て確認し、やることが終わると友達の様子を気にして学習に取り組む児童が多かった。学習が面白いと児童との関係がより良くなることを学んだ。
1月30日	3-2	国語	板倉	説明文において、児童の「わからない」部分や、友達との意見の「違い」を教師が大切に、繋ぐことで対話が生まれていた。そのためにも、児童が本文を深く読む時間が大切だと学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	児童の学ぶ時間を増やすために、導入やまとめの工夫をする必要があると学んだ。道徳でも資料から学ぶことができ、辞書的資料とレベルの高い課題によって対話が生まれることを学んだ。

名前 高橋 順子

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
10月2日	2-3	国語	八木原	児童が、前時で興味を持ったところを取り上げ、深く掘りさげながら心情に迫っていくときの発問の出し方、出すタイミングが参考になった。ペアでの伝え合いがたくさんできていた。
9月22日	2-2	音楽	佐藤	音の高低が目で見分けるように階名を貼る高さの工夫や、鍵盤ハーモニカの指使いが理解しやすいよう大きな手を黒板に貼っていた。「目で見える化」は、大切だと気づかされた。ペアの友だちどうして正しい指使いかできているか見合い教え合う姿を見て勉強になった。
10月29日	1-2	国語	湯浅	一人で考えるのが不安な子がペアや回りの友だちに助けられながら、少しずつ自分で考えられていく姿が見られた。先生の短い言葉や的確な指示の出し方が勉強になった。最後に全員が作った一文を楽しそうに発表していたのが印象的だった。
11月19日	2-1	算数	高橋	ジャンプ問題だったので、問題にあたる前クラス全体で丁寧に問題を読んだり何を問うているか全体で確認が必要だった。ペアで考えがつかずいるところのフォローが必要だった。
12月12日	なかよし	生活	益田 坂田	楽しく体験学習できるように細かな指導、目で見える化（画像、券売機の作成）がとても勉強になった。低学年も「なかよし」のクラスと同じ様なきめ細かさが必要だと気づかされた。

12月21日	1-1	国語	神田	自分もペアの友だちも困っているとき、他の友だちから答えを得ようとし、得た答えをペアの友だちと一緒に共有しようとする子どもの姿から「共に学ぶ」ということを学んだ。ペアと一緒に学びたい気持ちが育まれるよう自分のクラスで何ができるか考えたい。
2月12日	5-3	道徳	長嶋	資料を提示した道徳の学習もあるということ学びました。また、指導者の永島先生からモノリリース（多くの資料、辞書など）が充実していた方が良いということも勉強になりました。「子どもを全体を見る目」をもっと養わなければならないと思いました。

名前 佐藤 香

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
9月24日	2-2	音楽	佐藤	自分では全員を見ようとして、見ているのだが、先生方に自分の授業を見ていただくと、やはり見えていない部分があった。どんな会話をしてたのかが分かり、大変ためになった。
10月2日	2-3	国語	八木原	M君：なぜかたつむりくんに手紙を頼んだのかを一生懸命考えていた。あれこれ考えを浮かべ、「考えることが楽しい」と言っていた。考えることに喜びを感じる姿を見て、学びたいと思っている姿、場面を逃さないよう、指導をしていきたいと思った。
10月29日	1-2	国語	湯浅	プリントを回すことで、離席せず前後の児童の考えを知ることができていたので、自分も取り入れていこうと思った。
11月19日	2-1	算数	高橋	難しい問題で苦戦しながらも、児童はよく取り組んでいた。思考が行き詰ってきたタイミングを見計らって発問を軌道修正したり、声かけしたりしていこうと思った。
1月21日	1-1	国語	神田	一人で課題に向き合っていたが、徐々に隣、前後へと、交流が広まることで、語彙を増やしていた。交流することが自然になっていると、プリントの答えも豊富に書けるようになるのだなと感じた。
2月12日	5-3	国語	長嶋	問いに対して考えがうまく書けない児童への、声かけや、気持ちを汲み取ってあげることの難しさを感じた。書くことだけでなく、気持ちを聞いてあげることも大切なのだと感じた。

名前 八木原 聖

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	3-3	理科	野崎	Iさんは、全体共用の場面ではあまり聞けていない。しかし、個別解決学習になると、隣のMさんのプリントを見たり、辞書を引いたりしながらIさんなりに学習していた。教員の発言にも適切に反応していたので、資料と仲間を通して学んでいたようだった。
10月2日	2-3	国語	八木原	物語で必要などころ。大事「考えさせる場面」静かに、十分な時間、自分のペースで読めるときを確保する。全体共有は一回に一発言。語らせっぱなし。

10月29日	1-2	国語	湯浅	Sさんは解決に教科書を参考に行っているが、自力では解決が難しく、Tさんのプリントを見ても答えを書き出せない。しかし、先生の「友達のプリントを見させてもらってもいいよ。」という声掛けがあると、答えを4つ書けた。多くの解決情報や指示があると学びが進む。
11月19日	2-1	算数	高橋	Hさんは向いのYさんのノートを見たり黒板を見たりしながら解法を見つけ出した。しかし、「あと何個」の部分は考えられていなかったため、教師の支援が必要な瞬間であった。
12月12日	なかよし	生活	益田 坂田	T君は、O君の会話をよく聞いていた。その場にそぐわない意見に対しては、口を手でふさいだり、シーッとジェスチャーをしていた。目が向かなくても、耳をそばだてている態度を学んだ。
1月21日	1-1	国語	神田	F君がYさんに働きかけをし始めたのは、1枚目のプリントが終わってからであった。主体的に学習を始めたのは、やり方が分かり、ある程度、問題をこなしてからであった。これを学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	Wさんが冒頭の教師の話や発問に集中できておらず、資料の読み取りからようやく集中できた。32分になって初めてワークシートに考えを記述したことから、児童の学びを信じることを学んだ。

齋藤 文子

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
4月23日	3-3	算数	野崎	たくさんの時刻を計算することにより、1時間が60分であることを意識したり、時刻の表し方を習熟することができた。一か所で時刻がずれると、その後全部間違えるので、課題が難しい。しかし、一つの課題で45分繰り返し確認することができる課題であり、課題が大切であることを再確認した。
5月28日	4-2	音楽	田中	グループで何度も歌って確認することで、歌の山を感じ取ることができていた。思考だけでなく、何度も実際に歌ってみることで、友達と一緒に意見交換しながら実感できるよさが分かった。
6月5日	3-3	理科	野崎	昆虫だけでなく他の虫も調べることで、昆虫の見分けを明確に理解できるようになる。資料から必要な情報を見つけ出し、自分の力で共通項を探す活動は、昆虫の定義をより分かりやすくしていると思った。
10月2日	2-3	国語	八木原	音読しながらサイドラインを引くことで、自分の考えを明確にすることができる。ペアで話し合う中で、自分では気づかなかった読み取り方ができる。
10月8日	4-1	社会	島田	「きれいな水」をどう捉えるのか共有したので、児童が調べることが焦点化していった。教科書や資料など分かりやすく調べやすい資料を準備することで、どの児童も意欲的に取り組むことができる。
11月11日	4-2	体育	工藤	マイボールを準備したりパワーアップタイムで実践に生かす練習をしたりすることで、意欲が高まり主体的に運動できるようになる。ゲームを見ている子からの言葉かけを大切にすると、学びが深まる。
11月12日	3-2	書写	齋藤て	前時に書いた文字と比べることで、自分の課題が明確になった。字配りに着目することで、バランスよく大きく書くことが意識できていた。一枚書いては、その前に書いた文字と比べる時間があったり、友達にアドバイスをしてもらったりすると、一字一字集中して書けるようになる。

1月30日	3-2	国語	板倉	キーワードに着目することで、児童は内容を捉えやすくなる。接続語や順序を表す言葉からも、段落のつながりが分かり、次の段落に生かすことができていた。全体で、大切な言葉に着目することを共有することが、一人で学ぶことができるようになる必要条件だと思った。
2月12日	5-3	道徳	長島	写真、地図、被災児童の新聞、児童の作文等資料の種類を多く準備することで、児童は自分で資料を選び資料と向き合い学ぶことができる。資料は、課題に合うように選ばないと課題解決ができない。

名前 板倉敏美

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
4月23日	3-3	算数	野崎	班ごとに確認する場面で、なぜそうなったのかを一緒に考えている姿をみて、一緒に考えられる課題の大切さと子どもたちの関係性が大事だと知った。また、それぞれが答えを導き出す方法は違っていても、自分にとってやりやすい方法を選択しているのだろうとわかった。
5月28日	4-2	音楽	田中	子どもたちが考えるためには、環境の整備も重要だと感じた。歌の一番の山を探す課題では、何度も歌って確かめる様子から、自分の考えを伝えっぱなしではなく、班の友達の考えを聴き、実際に何度も確かめる様子から、一生懸命考えていることがわかった。
6月5日	3-3	理科	野崎	課題の設定だけでなく、課題に取り組むための材料の準備の大切さをとても感じた。既習事項や知っている知識を使いながら、いくつもの資料を見比べ、なぜ、どうしてもと友達の考えも聴き取り組んでいる子が多かった。文章に表すことが必ずしも大事ではないとわかった。
10月2日	2-3	国語	八木原	音読後の活動では、あまり線を引けず、なかなかペアの活動ができなかった子がいたが、伝えたいことはあったようで、考えながら話していた。その様子から、伝えることで考えを整理し、どこに線を引くか考える子もいるとわかった。また、音読の大切さも学んだ。
10月8日	4-1	社会	島田	全体で課題の確認をしてから班での活動に移った時、初めから4人で活動する班と、個人で活動する班があった。最終的には班でどうだったか聴き合うことは同じだが、ほとんど写すだけ子もいてそれぞれのペースでの学習を確保することの難しさを感じた。
11月11日	4-2	体育	工藤	それぞれの子どもたちが、マイボールを持つことで、ボールを持つ感覚などを覚えることができるのは大事だと思った。マイボールに愛着を持ち、どうしたらチームに貢献できるかを考えて行動するように組み立てられていて、シンプルにすることも大事だと感じられた。
11月12日	3-2	書写	齋藤輝	何度も書くことで、課題に向き合うことが大事だと感じた。また、比べるための手本や、前時の作品などが揃っていないと何度書いても課題へのつながりが弱いと感じた。比べるものが揃っていた子は、次にどう書こうか考えられていたし、ペアでも活動できていた。

12月4日	3-1	理科	齋藤文	金属なら電気を通すという予想に反する結果は、なぜという疑問になり、意欲的に活動していた。タイミングは違えど、何度も確かめることで、素材の違いに気付いていた。友達のどうして?という疑問を一緒に解決しようとする様子から、関係性の大事さを改めて感じた。
2月12日	5-3	道徳	長島	資料の大事さを改めて感じる授業だった。はじめは資料の膨大さに驚き、子どもたちはそこから今回の問いにたどりつくのだろうかと思ったが、資料同士を見比べる子もいて多様な資料を用意して子どもたちと結び付けてあげることの大事さを学んだ。

名前 野崎 智大

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	円の面積のジャンプ課題で、スムーズにできる児童は一人もいなかったが、45分間学ぶことができている。簡単な問題で45分持たせるのではなく、探求し続けることができることがはっきり分かった。しかし、その要因としては、わからない子へのケアがあり、班でのつながりが支えていたことがある。
5月28日	4-2	音楽	田中	歌の山がどこにあるのかという課題を班やみんなで考えた。歌詞に注目したり、楽譜に注目したり様々な視点が見られた。芸術教科の身体表現と理論がいたりきたりしている授業デザインが、子どもの学びや認識を深めていた。
10月2日	2-3	国語	八木原	一人が物語を読んでいるときに周りの子たちは多くが学びからはなっていくてしまうことがわかった。自分の授業でも、聞けていない子が多くいるんだろうなと感じた。
10月8日	4-1	社会	島田	社会の資料を活用することによって、学び続けられることがよくわかると同時にその活動中にどのタイミングで活動を修正していったり、深めさせる発問をしたりすればよいのかが難しいと感じた。熱中しているときに切るとは、難しい。
11月12日	3-2	書写	齋藤輝	書いていないときに学びが止まっていたことを考えると、書写のような実技教科では、数多く実践させることとその実践の質の向上ができるような資料を示す(手本やペアとの相談)ことで学びを保障することにつながるのだと思った。
12月3日	6-2	国語	曾志崎	立たせて音読をすると急いで読み終わって座るという現象がよく起きる。それは最後の一人になって読んでいるのが恥ずかしいからだろう。恥ずかしくない空気を作るかみんなが読み終わるまで早く終わった子は2回目を読んだりするというような工夫がいるのではないだろうか。班で代表で発表というのを押し付けていて内容というよりも人間関係的な決め方がよく起きる。
12月4日	3-1	理科	齋藤文	最後の発表の時にみんなが発表している子を見ている中で、見ていない子がいた。その子は、缶を見ていた。聞いていないようで一番考えながら聞いていたのかもしれない。逆に、聞いていないようで考えていない子も存在するだろう。

1月28日	6-3	理科	関原	ワークシートに何も書いていない（書けない子）の学びについて深く考えさせられた。手が動いていないし、班の友達と話す様子もなく、学びの様子が見えづらいが学んでいるということもあり得る。
1月30日	3-2	国語	板倉	国語の説明文の読みでも様々な読み方が存在していることがわかり、それぞれの読みに合わせた深めさせ方は、もはや一斉指導ではできない。班が支えとなり、深めていくしかない。
2月12日	5-3	道徳	長島	子どもたちが学び続けるために資料が大事であり、この授業では、誰もが資料に向き合い学び取ろうとしていた。しかし、課題と資料の整合性によって、教師が狙いとする学びになるかどうかが決まる。

名前 島田 正恵

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5・28	4-2	音楽	田中 (澄)	互いの音を聴き合い、重なり合う響きを感じ取りながら...という点で子供達が互いを意識して取り組んでいる姿がたくさん見られた。表現の工夫では盛り上がる歌詞とその理由、そして歌い方の工夫で自分の言葉で表現している児童が多く、技術面の支え合いや活動のつながりが学べた。
6・5	3-3	理科	野崎	資料がたくさんあり、3年生なりの読み取り方を楽しく見る事ができた。資料から一人一人の学び方が違う所がおもしろく、班の話し合いが活発になったり新しい疑問や課題が生まれたり資料と児童のつながり・児童同士の色々なつながりが見られ資料の大切さを改めて学ぶ事ができた。
10・2	2-3	国語	八木原	子供達の学習作業の点から、聞くこと・考えることをペア学習で行うことにより、思いや気づきが深まり発表につながる事を感じることができた。時間の配分と教師のペースと子供達のペースなど、子ども達の記憶の点から授業の流れが分かる板書の大切さを学んだ。
10・8	4-1	社会	島田	社会科の授業の進め方として、資料を通して調べ課題解決に到達する流れにした所、グループ学習をしながら各々のペースで進めていた。（周りを見て、話を聞いて、板書を見て...）色々な場面で資料の見方や資料の選択等、グループの違いを見ることができ、資料と学びをつなぐ点で、資料の数や種類等工夫が必要である。
12・4	3-1	理科	齋藤	回路につないで電気を通す物と通さない物を実験する活動がとても意欲をかき立て、たくさん実験する事で比較・分類する事も共通点・差異点を考えることも班で話し合うことで進められていた。4人の中で、役割が上手く機能している班とそうでない班があるので、個々の性格・能力を配慮した班づくりの重要性を学んだ。
1・30	3-2	国語	板倉	「大事な文」のを見つけ方を学ぶ学習で「問い」－「答え」を見つける観点を色々なキーワード（分かった事・考えた事・行列・道すじなど）や、つなぎ言葉をもとにしたが、捉え方が難しく、ある程度絞って共有することが大切と学んだ。また、思考のつながりの面で理由づけの発表が考えを深めていたと思う。
2・12	5-3	道徳	長島	道徳の授業における資料の使い方が参考になった。資料の多様性・それを活用する力等、個人差はあるがそれぞれに応じて取り組んでいること学んだ。また、個人からグループ、そして個人へとつなぐタイミングをしっかりと考えていくことの大切さを学んだ。

名前 工藤 大輝

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
4月23日	3-3	算数	野崎	早く解き終わった子でもずっと学び続けられることが分かった。もう一度一つ一つ確かめたり、実物を使って考えたり、友達と一緒に確認したり、分からない子に順序立てて説明したりすることで上位の子もさらに学べていた。
5月28日	4-2	音楽	田中	音楽でも学び合うことの大切さがわかった。グループで歌う時には自分でめあてや工夫しようというところを意識して練習ができ、一斉に歌う時には本番のような心持ちで練習した成果を発揮する場になっていたような感じがした。
10月8日	4-1	社会	島田	学び合うタイミングは児童によって違い、最初から班のメンバーで話しながら埋めていく子と最初は自分でどんどん埋めていく子で様々いることがわかった。また、停滞している子がしっかり聞くことができているとできる子も学びが深まり、グループの良さができていると感じた。
11月12日	3-2	書写	齊藤輝	技能科目では、やる回数をたくさん確保したほうが上達していくと感じた。めあてを提示して取り組ませても意識できていない児童がいることがわかった。その場合、教材を工夫するかスモールステップにする手立てがあると良いと感じた。
12月4日	3-1	理科	齋藤文	色々な実験道具があると、子どもたちは飽きずに実験して学び続けることができるので道具の大切さが分かりました。実験の時にはねらいをしっかり意識させて取り組ませることが大切であると実感しました。
1月30日	3-2	国語	板倉	違いがあるから話し合いが生まれることが分かった。「班で違いはない?」「どうして違うんだろう?」と発問し、考えが深めていく。また、発問の言葉は精選してこの投げかけ方ならどう考えるかなと考え、発問することが必要である。
2月12日	4-2	道徳	長島	道徳での学び合いの仕方がわかった。課題に合った資料を多く用意し、アプローチの仕方をたくさん用意してあげることが大切だとわかった。課題を学問的に設定することが難しいが、考えさせたいことを明確にすると良いと思った。

名前 細野 愛

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	図形を見て考えるときに、「何使ってもいいよ」と先生が言ってくれたので、コンパスを使ったり、はさみを使ったりして発想を広げられる児童が多かった。また、問題がドーナツ型の図形ということもあり、45分間飽きずに考えることができた児童が多く感じた。
6月5日	3-3	理科	野崎	提示する資料の大切さを感じた。教科書にない資料(図鑑等)を見せることで、興味をもって読んでいた。読み取ったことを班で共有し、足の数を確認できていた。また、正しい情報をタイミングよく配ることが大切だと思った。
6月18日	5-1	書写	細野	3~4人グループの隊形での授業だったので、同じ班のメンバーに支えられながら取り組むことができていた。「しんによ」のはらい部分につまづいていたWさんが、隣のOさんのはらい方を真似しながら文字を書くことができた。
10月2日	2-3	国語	八木原	Oさんが教科書に線を引いたり言葉を書き足したりする姿から、友だちの発表を聞いて自分にはなかった読み取りを、一生懸命理解しようとしているんだなと思った。

10月4日	5-2	家庭科	中元	ペア学習の大切さを学んだ。ミシン1台を二人で使うことで、Tさんが作業している様子を、Mさんがじっくり見ることができるので、自分の作業のときに生かせることがその児童の自信につながると思った。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	ずっと指を見て何もしてないように見えるMさんだが、CDが鳴ったら口を動かし始めたり、聴こえた単語を言ってみたりしているのを見て、インプットさせたいことを繰り返すことの大切さを学んだ。
12月3日	6-2	国語	曾志崎	MさんやAさんの行動から、信頼できる人や安心できる人には、シーンとしている空気でものぞいたり話しかけたりできることが分かった。また、様々な人の作品を読むことはとても刺激になると思った。
1月28日	6-3	理科	関原	Wさんのグループから、「自信がないと書かない」ということを学んだ。3人とも誰一人として声を発さず、固まっている様子だったが、教師が来て助言をもらったことで、「それでもいいんだ!」と自信が付き、お互いのシートを見合いながら書き始めていた。
2月12日	5-3	道徳	長島	自分たちと同じ年代の児童が書いたものに興味がわくことが分かった。本時の授業は資料が多く、写真に目が行きがちなのではと思っていたが、被災した児童が書いたファイト新聞をよく読んでいる児童が多かった。

名前 中元 希琳

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	ジャンプ問題の前にやった問題で、「?」だったYさんを取り上げて確認したことで、他の子の「?」の解消、復習にもなっていた。また、45分間学び続けるという意味で、全員が問題に最後まで向かっていた。ジャンプ問題の設定は本当に重要である。
6月5日	3-3	理科	野崎	途中ば一っとする場面もあったWさんだったが、班のみんなを巻き込んで課題に取り組んでいた。身を乗り出して、資料を指差しながら一生懸命Oさんの「?」に答えていた。そこから、子ども同士の言葉や仕草などで理解が深められる環境が大切だと学んだ。
6月18日	5-1	書写	細野	グループの形で課題に向かうことで、存在がお互いを支え合っていた。特にKさんが、言葉数は少ないものの、周りをよく見て課題に取り組んでいた。また、本時の課題に立ち返ることでポイントが明確になっていた。
10月2日	2-3	国語	八木原	Sさんがペアの確認の時に、隣の席のAさんに一生懸命説明していた。Sさんからはおとなしさが見えたが、その様子から発言を拾ってあげたいと思った。永島先生の指導からも、子どもに預ける時間を考えていかなければと学んだ。
10月4日	5-2	家庭科	中元	いつも説明を長々としてしまうので、先日の指導から短く・ざっくりを意識した。子どもたちは一生懸命ミシンと向かい合い、友達のやっている様子から吸収しようとする姿が見られた。2人で1つのミシンを使うことでも、自然と学び合う空気になったと思う。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	ペアの確認をやる中で、Mさんが小さい声ではあったが、隣に伝えていた。また、隣の存在に支えられながら課題に取り組むことができていた。そこから、課題に取り組む雰囲気づくりの重要性を再度学んだ。

12月3日	6-2	国語	曾志崎	TさんとYさんから、自分たちの時間になるといきいき活動するということが分かった。国語が苦手でも、友達作品を見て、考えることで自分の知識にもなるので、横の確認を大切にしたいと思った。
1月28日	6-3	理科	関原	Oさんたちのグループでは、沈黙が続いていた。ぱっと見ると何も考えていないように見えたが、本人たちは悩みながら考えていたようだ。すぐに声をかけるのではなく、待つ声かけることも大切だと学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	全員を見る中で、資料を与えられた瞬間に、目を輝かせて食いついていたことが分かった。YさんとKさんは、手元の資料とモニターをじっくり見て、課題に取り組んでいた。日常の授業の中で、資料提示ができると、授業が充実していくと学んだ。

名前 長島 理史

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	算数における問題の質はとても重要だということ学んだ。一つの問題を解くのにたくさんの会話が生まれていた。今回の場合は、あえて解答を教えなかったため、次時に向けて期待が高まると感じた。
6月5日	3-3	理科	野崎	とにかく資料が多く良かった。虫に関してもカラー刷りでとても分かりやすくよと感じた。実物がどうしても用意できない場合は、できる限り多くの資料でそれを補う必要があることを学んだ。
6月18日	5-1	書写	細野	しんじょうと中の分解掲示物の使用により、児童が具体的に課題へ向けての方策を立てることができていた。教師のアドバイスで何度も練習している児童が多く、アドバイスの重要性を学んだ。
10月2日	2-3	国語	八木原	ペア学習にしても、発表を聞くときにしても、「なるほど。」「そうか。」など、反応することが学びにつながることを学んだ。意見を掘り下げて粘って意見を考えさせることも大切だと学んだ。
10月4日	5-2	家庭科	中元	学び合いをする上で、その前提として本時のスケジュールなどを掲示することの大切さを学んだ。また、今回のように細かい作業が多い時にはボランティアの方の有効活用ができると感じた。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	大きな声で周りの児童に関わりを持つようとする児童がいる一方で、地道にコツコツやっている児童もいた。授業でいかに学んだかを確認するには、まず個人でじっくり考える時間が大事であることを学んだ。
12月3日	6-2	国語	曾志崎	今回の授業で大事なことは事前の準備だと感じた。前時までの濃密なワークシートを参考に児童は筆を運んでいた。国語で文章を書く際には、資料と単元計画の大切さを学んだ。
1月28日	6-3	理科	関原	課題が深く自由に考えられるものだったので、児童は懸命に考えていた。たくさん話す子はその様々なヒントを周りに与えるこだと感じた。友達の一言で勇気をもって書くことができる原動力にもなることを学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	児童にとって、心を揺さぶられるような資料収集の大切さを学んだ。また、資料に見合った発問の用意、そして発問に見合った資料の用意をしないと何をすればよいのか分からなくなることも学んだ。

吉田 亘

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	時間内に解ける児童は現れなかったが、発想の良いところをピックアップして共有することで45分続き続けることができていた。また、作図することが複合図形での構成に気付く重要な要素であることを子供たちの活動から学んだ。
6月5日	3-3	理科	野崎	複数の資料を見比べることで、思考したことが確信にかわっていた。グループ内では、お互いの意見の根拠にそれぞれの資料が使われており、確認し合うことで資料をまた読み解いていた。
6月18日	5-1	書写	細野	課題が明確になることで、児童が学び続けることができるということを学んだ。T女は、しんによろを課題と見据え、やり方を友達に聞いたり、自分で繰り返し練習したりし、納得できるしんによろを書こうと取り組み続けていた。
10月2日	2-3	国語	八木原	ジャンプ課題と言うことで、2年生には難しい課題と感じたが、子どもたちがいろいろな角度から考えて意見を出し合っていた。ジャンプ課題のよさを感じるとともに教師のまとめ方の難しさを感じた。
10月4日	5-2	家庭科	中元	学校ボランティアがたくさんいたことにより、実に細部まで目が行き届いていた。また、ボランティアの方の伝え方も一律とまではいかなかったので、逆に多様な言葉の中、学ぶことができていた。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	歌を繰り返す場面で、ゼスチャーを入れたり動作化を行うことで、子ども達がより積極的に取り組んでいた姿から、ただ行動するだけでなく、全体でわかり合いながら行動することの大切さを学んだ。
12月3日	6-2	国語	曾志崎	普段は集中力が長く続かないK君の積極的に友達の作文を読む姿から、身近な素材で行うことが学習者の意欲を効果的に高めることを学んだ。
1月28日	6-3	理科	関原	グループ学習では、必要な所を自分のものになっているO君や、意見を聞き参考にしているT君など、1つの話し合いの中に児童のレベルに応じた学び方があることを学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	膨大な資料を読み取るには、時間や労力がかかるが、であるからこそ、読み取ったことや感じ取ったことをアウトプットしたくなるのだとI君の取り組みから学んだ。

曾志崎弥生

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6-1	算数	吉田	ジャンプ問題に対して、多くの児童が意欲的に取り組み、活発な会話が飛びかう場面が見られた。友達のひらめきに傾聴する姿に学ぶ意欲を感じると共に問題設定の重要性を学んだ。
6月5日	3-3	理科	野崎	多くの資料が準備され、子どもたちが解決に向けて意欲的に調べる姿が見られた。実物がない場合の資料準備の大切さを学びました。
6月18日	5-1	書写	細野	課題解決に向けて、友達がどのように取り組んでいるかを目の前で見ることができ、実技学習での学びあいの効果は大きく、友達からのアドバイスも理解し易いものになっていることを学びました。

10月2日	2-3	国語	八木原	ペア学習から全体での意見交換へと自然な形で進んでいき、次第に意見を掘り下げて考えを共有することのよさを学びました。
10月4日	5-2	家庭科	中元	事前学習でしっかりと手順を理解し、分からないときは周囲の友達のをを見てやったり、ボランティアさんに確かめるなど、集中して取り組めるような環境づくりの大切さを学びました。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	ペアで確認しあいながら、繰り返し学習をし自信をつけていく様子がみられた。じっくりと取り組んでいる子や、大きな声で関わろうとしている子がおり、授業の雰囲気づくりの大切さを学びました。
1月28日	6-3	理科	関原	アイデアを出せる子の存在が、学び合いをする上で重要な存在であることを学びました。
2月12日	5-3	道徳	長島	同年代の子ども達書いた新聞の資料をじっくりと読んでいる子どもが多くいた。資料選定の重要性を学びました。

名前 関原 嘉紀

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
5月21日	6年1組	算数	吉田	Mさんの活動の様子から、グループ活動の良さを学びました。友達が試行錯誤していることで、継続・集中して学習に取り組むことにつながり、1/4の円を1つの円に戻すことに気づき、答えを導くことができました。
6月5日	3年3組	理科	野崎	1つの課題の解決に向けて、様々な取り組み方があることを学びました。資料、教科書、友達など児童の学びを深められる準備が大切と感じました。
6月18日	5年1組	書写	細野	Kさんの学ぶ姿から、発言することが理解していることではないことを学びました。同じ班の3人が気づいたことを、よく聞いて自分の練習に生かしていました。
10月2日	2年3組	国語	八木原	ペアがいることで、安心して学ぶことができていました。自分の考えを話せたり疑問について2人で考え合えることがいいなと思いました。また、意欲や関心を高めたり継続したりできると思いました。
10月4日	5年2組	家庭科	中元	児童1人1人の学び続ける力を感じることができました。分からないことは、周りの友達やゲストティーチャー、先生に確かめ学習を進めていく。説明よりも作業の時間を大切にしたいと思いました。
10月15日	5年2組	外国語	畑仲	外国語では、特に先生や児童の言葉をよく聞き、言葉や発音の違いなどに気づくことが大切だということを学びました。聞かせるための展開を考え映像や資料の準備が大切と思いました。
12月3日	6年2組	国語	曾志崎	Mさんから「学び合いのよさ」を学ぶことができました。学力が低位の児童でも、他の児童から自分を評価してもらえることで自信を持って授業に取り組むことができた。
1月28日	6年3組	理科	関原	発問の難しさを学びました。十分な資料が用意されていたとしても、教師の発問や板書によって、児童の思考を狭めたり停止させてしまう。問題に迫れるような発問について考えていきたい。

2月14日	5年3組	道徳	長島	準備をする「資料の種類」について学ぶことができました。 多くの種類のものを集めることだけでなく、問題とのつながりも意識することが大切ということが分かった。
-------	------	----	----	--

澁田 侑希

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	3-3	理科	野崎	資料の活用の大切さを学んだ。次々と出てくる資料に興味をもち、学習を進めるKさん。資料の多さに苦戦するIさん。など資料によって学びの姿は様々であった。だが、資料だけでなく友達の発言に耳を傾けて学習を進める姿が見られ、資料が苦手な児童もそれを補うように学習を進めている姿が見られた。
6月18日	5-1	書写	細野	学びの質を高める発問の大切さを学んだ。書き進めていく中で、字を直していくポイントを探すときに、自分の字を良くしたい思いが先になり、本時のめあてであった「しんにょうと中のづくり」から発言が遠ざかってしまっていたときに、細野先生からめあてに戻る発問があり、Fさんを中心にめあてに沿った学びにつながっていった。
10月1日	2-3	国語	八木原	Yさんの、範読から気持ちを読み取るためのサイドラインを引く姿から、本時の中心となる学習へとつながる学習作業のさせ方の大切さを学びました。Yさんは、「」の部分をはたすら引くだけだったのに対して、Mさんはサイドラインを引いて悲しい・楽しいなどの言葉をつけていた。より深めさせるため、作業を分けるなどの工夫をしていく必要がある。

益田佳代子

	年組	教科	授業者	学んだこと
9月24日	2の2	音楽	佐藤	2年生でも自分なりの方法で教えてあげている姿がよかった。先生の教材の工夫で子供たちが集中して楽しく授業に取り組んでいた。
10月2日	2の3	国語	八木原	登場人物に気持ちになって読み取ろうとする様子が見られた。もう少し教師の発言を抑えて児童にゆっくり考える時間を作るとよいと思った。
11月19日	2の1	算数	高橋	ジャンプ問題で難しさがあつたが、相談したりいろいろ工夫したりして何とか答えにたどり着こうと頑張っている様子が見られた。問題文をわかりやすく作る大切さも学んだ。
1月21日	1の1	国語	神田	1枚目のプリントは周りの様子をうかがう子もいたが、2枚目以降は安心して書き込んだり話し合ったりすることができていた。ペアで相談して1枚の用紙に記入させても良いのかなと思った。
2月12日	5の3	道徳	長島	膨大な資料から必要なものを選び出して考えをまとめていくことの難しさと大切さがわかった。児童は課題に対して真剣に取り組んでいたと思う。

名前 坂田 俊行

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	3-3	理科	野崎	教材の提示の仕方一つで、調べ学習を効率よく進めることができる反面、児童によっては逸脱してしまう様子が見られた。情報の提示の仕方にも配慮が必要だと学んだ。

9月22日	2-2	音楽	佐藤	話し合いの時に、隣の席の児童が欠席のため一人だけの場面が多かった。話し合いができていなさそうだったら、周りの児童と繋ぎ、学びの保証を確保する必要があると学んだ。
10月2日	2-3	国語	八木原	隣の児童が寝てしまい、何度も起こしていたが起きなかった。その際に学びたい意欲があるものの学べない状態であった。学びの保証を確保できる配慮や対応が重要だと学んだ。
10月29日	1-2	国語	湯浅	プリント活動に取り組みにくかった児童が、グループ内でプリントを交換し、見せ合うことでやり方がわかり、活動に取り組むことができていた。隣同士だけでなく、グループでの関わりも大切だと学んだ。
1月21日	1-1	国語	神田	自ら考え行動できる児童が多く、必要な時に周りの児童と学び合いの学習ができていた。振り返り時に、手遊びをして話を聞いていなかった児童がいたので、対応や配慮の重要性を学んだ。

名前 田中澄美

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
4月23日	3-3	算数	野崎	算数セットの時計を手元に置くことで、個々の力に応じて課題に取り組んでいた。高位の児童程、45分間集中力が持続し、自分で探求していく姿が見られた。
6月5日	3-3	理科	野崎	図鑑より引用した資料が効果的に扱われていた。児童の疑問を解決する為の正しい情報をタイミングよく与えることが大切。国語で学習した辞書の使い方も取り入れられ、学びが継続していた。
10月2日	2-3	国語	八木原	話を聞き逃してしまった、聞いていなかった、聞いていても忘れてしまった等、話を聞いていたかどうか活動内容に影響していた為、板書の必要性、役割を改めて考えさせられた。
10月8日	4-1	社会	島田	人間関係が良好なグループは、個で学ぶ時間、他者を頼る時間を自然に使分け、課題解決の時間が充実していた。他者との関わり方の特性が学び方に関係してくる為、性格や人間関係に配慮した援助が必要。
12月4日	3-1	理科	齋藤文	十分に準備された実験道具によって、子ども達の意欲が向上し、学びが継続していた。グループで活動しながらも、個々のペースで探求しており、事前準備や活動形態の工夫の大切さを学んだ。
1月30日	3-2	国語	板倉	子ども達にとっては、「大事な」という言葉の捉え方が難しく、その時間の学びに必要なクラス全体で共有できる明確なキーワードを示すことが課題解決に繋がっていくと学んだ。
2月12日	5-3	道徳	長島	教材文の主人公の姿から迫る価値を追っていくのではなく、道徳でも本文以外の資料から学びを深めることができると知った。但し、資料と課題の関わりをきちんと持たせることが大切。

名前 齋藤 輝子

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
----	----	----	-----	-------

4月23日	3-3	算数	野崎	クラスみんなが解き続けていることで、自分なりに時計を動かして確認しながら記入できていた。1時間を学び続けられる課題を準備することの大切さを再認識した。困ったら聞ける人間関係が重要。
5月28日	4-2	音楽	田中	教師の投げかけ方次第で、課題に対してのとらえ方がより具体的になることが分かった。個人で考えさせ、グループで話し合い、全体で共有することで、意見のすり合わせができ、指し示したい方向へと導くことができる。
6月5日	3-3	理科	野崎	誰が上位、下位ではなく、どの子も他の子の意見に耳を傾け聞く→意見を出す→考える→調べる→それを聞いて意見を出すのサイクルができていた。学び続けられる課題の設定が大事。(根拠となるもの=図鑑・資料・教科書)
10月2日	2-3	国語	八木原	教師の発問に対して、「わからない」という反応をしている子ほど、考えているし、感じている。だからこそ、他の児童が発言しているときに、教科書に線を引いたり、理解しようとする。
10月8日	4-1	社会	島田	アクティブラーニングが自分のペースで学ぶということを前提とすると、課題に対して、繰り返し教科書・資料・ノート・自分・友達とつながることで学びが持続するということを学んだ。
11月11日	4-2	体育	工藤	児童の思考に寄り添った課題の設定のしかたが、児童の活動に観面に出ることを学んだ。授業の中で、課題に沿った活動ができていくか教師の見る目を養うこと。
11月12日	3-2	書写	斎藤	自分のペースで学び続けるために、机の並び(見たい時に、見ることができる)、半紙の置き場(出歩かないで済む)などの環境を整える工夫が必要であることを学んだ。
12月4日	3-1	理科	齋藤文子	児童が「金属は電気を通す」ということを知っているが、10円玉は銅だから金属ということはわかっていない。だから、電気を通さないスチール缶とアルミ缶と比べてみることで、疑問が出てくる。そこで、『やってみなきゃ、分からない』という動機が出てくる。
1月30日	3-2	国語	板倉	学びの時間が極端に短い子、正解のみを知りたがる子への有効な手立ては、問の言葉を精選すること。だからこそ、教師がより深く教材を理解し、児童の反応を拾い上げられる技能が必要。
2月12日	5-3	道徳	長島	児童それぞれに考えを持つために、資料の準備が必須。その資料は、写真・文章・教科書・辞書・地図と多種類、大量に。しかし、課題を追求するためには、マッチングしているかを再考する必要がある。

名前 畑仲 泰之

月日	年組	教科	授業者	学んだこと
6月5日	3-3	理科	野崎	Oさんは課題を解決するために、隣のKさんを頼っていた。書いた答えを見比べていた。Kさんは自分の考えを整理するためにOさんに話しかけていた。学びを確かなものにするために支え合っていた。

6月18日	5-1	書写	細野	Sさんは自分の書いた字が教師が示したポイントに合っているか不安そうだった。そこで、隣の児童の字をじっとながめ、納得していた。自分の中での○×の基準が学習には必要で、それは全員同じでない。
10月2日	2-3	国語	八木原	Aさんは常に思考していた。隣の児童と話すこともなく、発問が続いても思考していた。自分がわかる発問がやってくると、堰を切ったように、隣の児童と会話を始め、自分の考えを確認していた。
10月15日	5-2	外国語	畑仲	Mさんは、自分のペースでしか学べないので、いちいち隣と確認させるのではなく、聞こえた英語の音を自分のなかで処理できるまで聞かせて、そこから気づきを引き出すように授業改善ができた。
11月19日	2-1	算数	高橋	Sさんはかけ算を使って考えるという課題に正対し、停滞していた。しかし、全体での話を聞き、わかったところで鉛筆を動かして考え始めた。全体の話は児童一人一人必要な量が違う。
12月3日	6-2	国語	曾志崎	Yさん、Aさん、Mさんは、授業中に何度も何度も掲示物を確認していた。教室中に学習に活用できる掲示物があり、掲示物との対話で学習を進めていた。Yさんは教科書とも対話を続けていた。
1月28日	6-3	理科	関原	Aさんは他の児童が自分の考えを伝えていても、自分が作りたい発電を利用したものが決まっていて、考えを変えなかった。自分の意見をもち、自分で学びを進めていける児童を育成したいと思った。
2月12日	5-3	道徳	長島	Oさんは被災者を支援することについて日頃から情報のinputがあったのでスラスラと書き始めたが、UさんやWさんは膨大な資料を読み込むことから始めた。児童によってinputの量が違うことを知った。

VI 成果と課題

文責 野崎

令和元年度の学校研究の成果としては、おおまかに以下のことがあげられる。

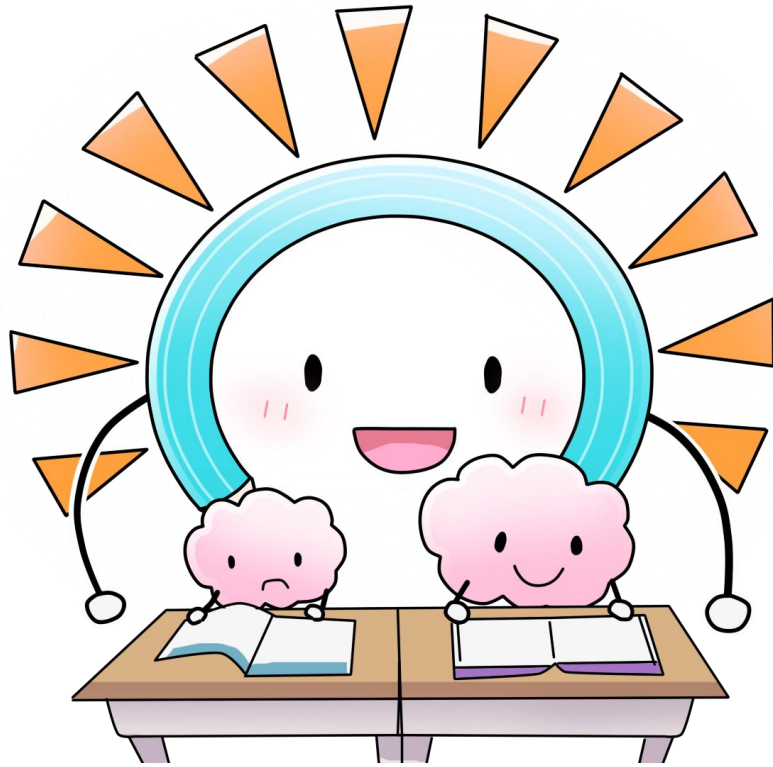
- | |
|--|
| ①児童の人間関係
②資料の活用
③見る力の向上
④仕事量の減少 |
|--|

- ①児童の学び方に変化が顕著にみられた。わからないときには、ペアやグループで聞き合える関係が当たり前ようになってきた。
- ②資料を使うことにより主体的・対話的・深い学びを実現しようとする授業が多くなった。
- ③ブロック研修、学び合い研修会・先進校視察等を通して、教師の子どもの学ぶ姿から学びの様子を見取る力が向上した。その結果、自分の授業を振り返る機会が増え、実践に生かされている。
- ④校内研修の「部」をなくしたり、様々な取り組みを精選したりすることにより、仕事量を軽減することができた。その結果、教材研究や子供理解に費やす時間を確保しやすくなった。

学校研究続けていくにあたっての課題としては、以下のようなことが挙げられる。

- | |
|---------------------|
| ①全体と個人を見る目
②自習対応 |
|---------------------|

- ①については、個々の児童の学びを見取ることは慣れてきたが、学び合い研修会でのワークショップに出されるような視点(例えば、〇〇分時点での学んでいなかった児童はだれか、何人か。など)での見取る力はまだ身に付いてはいないと言える。これに関していえば、そのような意識を持ち数多く授業を見ていくことが大事であるとする。
- ②ブロック研修の際の自習について対応が大変であった。支援員や授業がない教員に対応してもらうことが多く、その対応を毎回考えるのが負担であった。来年度は、ブロック研修の持ち方についても、改善していかなければならない。



千代田小マスコットキャラクター ちよSUN